



第41図 八幡原N-31遺跡 土器拓影図(3)

よ良調整されている。焼きは固いものとややもろいものの両方を含む。共通して沈線のみが施され、無文部分がよく研磨されている。また、鉢形土器は口辺に丸い刺突文を伴っている。鉢形土器は平らな口縁が外反する器形である。第41図5は厚手で、盃状の口縁突起をもち、刺突が両面より施され円窓風である。第41図6～9は1～3ヶの円い刺突を口唇・頸部に配し、一～二条の溝でもって結んでいる。図10～12、15～16は沈線による連弧文を施している。第37図6～7は、筒形土器である。6は横走する平行沈線の切れ目に刺突文を施している。7は沈線がきわめて深い。他の時期にはみられないものである。

#### g 類 土 器 (第十三図版2, 第37図1～2, 第41図18～26)

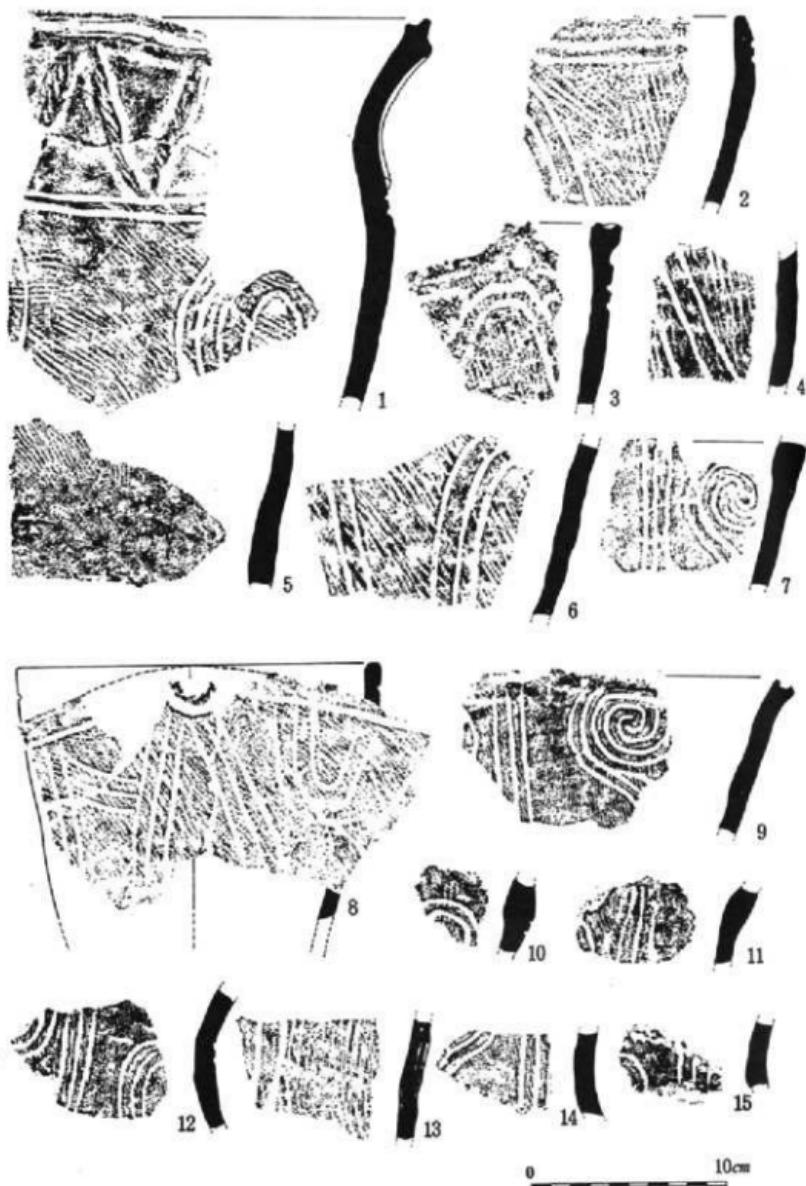
曲線的な磨消繩文を有する土器を一括した。色調は、全般に赤褐色もしくは褐色で、胎土に雲母片・石英粒子等が少量含まれる。器面は比較的良く調整されている。焼きも一般に固い。器形は平らな口縁が外反し、頸部でしまり胴部でややふくらむ深鉢(第37図1, 第41図18, 21, 22)や波状口縁の外反する鉢(第41図19～20), 口縁の内湾する鉢(第37図2)などである。いずれも口縁・頸部に円い刺突文を有し、口頸部には無文帶をもっている。磨消繩文は、太く深い沈線をもって地文の繩文を区画し、一方を磨消するものである。わずかに渦巻様のものがみられる。全般に文様が定形化せず、磨消部分に繩文を残す傾向がみられる。地文の斜繩文は、L R 単節の短かい原体を横位・斜位に回転施文しているが、第41図24～25は無節繩文を施している。

#### h 類 土 器 (第45図1～3)

連続刺突文を主文様とするものである。色調は、やや黒みがかった褐色で、胎土は雲母片・砂粒を少量含む。器面調整はやや雑である。焼きは普通である。器形は、緩やかに波うつ、波状の口縁がゆるくすぼまって下降する深鉢である。地文の繩文に二本一对の沈線を加えて、口縁にはゆるくまん中をたらした紐のように、体部には波頂の下へ垂下する区切れのように、そして底部近くで横走させ、全体が窓窓状に区画する。口縁の地文は磨消し、沈線間には円棒状の刺突をくり返して連続刺突文としている。刺突方向は器面に対して直角である。地文の繩文は撫りのきついL R 単節原体を縦斜位に回転施文している。

#### 第Ⅱ群 土 器 (第42図, 第45図4)

第Ⅱb層出土の沈線文土器である。沈線文の主体は渦巻文である。ほとんど磨消繩文はみられない。沈線の単位が2～3本一组となっているのも特徴的である。文様は主として



第42図 八幡原No.31遺跡 土器拓影図(4)

縦走する傾向がみられる。大きく二つに細分できる。

#### a 類土器（第42図1～15）

地文を撫糸文とする沈線文土器である。色調は、全般的に黄褐色である。胎土には雲母片や石英粒等を含む。比較的量が多い。しかし、胎土はよく精選されている。器面調整は普通である。焼きは普通である。器形は、平らな口縁が外反し頸部でしまり胴で張る深鉢、平らな口縁がゆるく内窪して開き徐々にすぼまる深鉢である。口辺が肥厚し、口唇および口辺に一条の太い溝をもつものが多い。まれに口縁に山形の隆線貼付文をもち、器面を縦位に区画せずに渦巻沈線を施したものもある（第42図1）。全般に文様は、地文の上に縦に垂下する沈線区画をつくり、その中に渦巻文を施す。渦巻文は左巻きでS字形の上下端が渦巻いたように見える。またところどころに沈線区画を斜めに切るような沈線文・Y字状沈線文が走る。地文は撫りのきついL・R無節の撫糸文で、殆んど縦位に回転施文している。なお沈線の工具は、棒状のものより、茎状のものを用いたとみえ、比較的細く深い円い断面形の沈線にいくつもの筋が走っている。

#### b 類土器（第45図4）

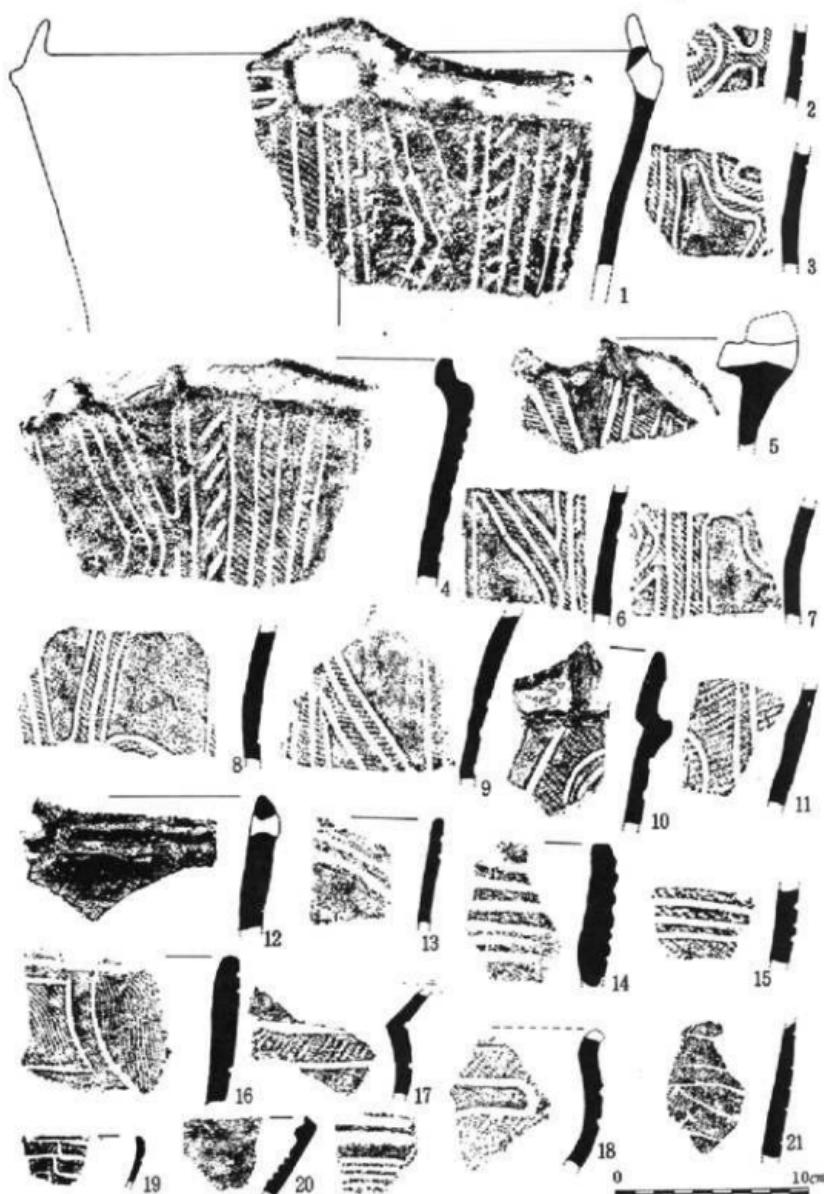
a 類土器と殆んど同じであるが、赤褐色の色調、砂粒を含まない胎土、器面調整が良く、焼きも固いこと、そして地文が繩文であること等で区別される。沈線は、一段と太く深い。先端が丸味をもつ棒状工具で施文されている。地文の繩文はL・R単節原体を横位に、縦位に回転施文されている。横位なのは口辺のみである。

### 第Ⅳ 群土器（第十三図版1、第38図1～5、9、第42図）

第Ⅰ a 層出土の磨消繩文土器を一括した。赤褐色の磨消繩文の明確なものばかりである。殆んど平らな口縁につく舌状の口縁突起に穴があけられているのも特徴的である。三つに細分できる。

#### a 類土器（第十三図版1、第43図1～9）

縦位に流れる磨消繩文をもつものである。磨消繩文は紐状になって器面をおおうのである。色調は赤褐色で、胎土は雲母片・砂粒子を含むが、よく精選されている。器面はよく調整されている。焼きも比較的固い感じがする。平らな口縁が外反する深鉢である。口縁には舌状の突起があり、口縁が「く」の字形に内傾するところに大きくぼむ溝を走らせ、突起の下部で丸い大きな穴をあけて溝を切っている。器面全体が、縦に垂下する沈線によって区画され、その間をつなぐように斜めの沈線を用いて特有な磨消繩文を施している。磨消繩文は、磨消部分を大きくとり、繩文部分を細紐状にしている。とこ



第43図 八幡原No.31遺跡 土器拓影図(5)

ろどころに斜位の刻みを入れた文様もある。沈線はやや太く深い。地文の繩文はLR単節の原体を縦斜位に回転施文している。燃りがきつく、くっきりと見える。

#### b 類土器（第38図1～4）

縦位に流れる曲線的な磨消繩文を有するものである。色調は赤褐色で、胎土に雲母片や砂粒を少量含むが、よく精選されている。器面はよく調整され、焼きも比較的固い。平らな口縁が外反する深鉢とみられる。口縁には口縁突起（舌状の）がつき、口辺を「く」の字に内傾させて走らせた溝を突起の下部の穴で切っている。体部一面に幅広の曲線的な磨消繩文を縦位に展開させている。地文の繩文は、RL単節原体を横位に回転施文している。沈線は太く深い。先端が丸味をもつ棒状工具を用いてある。

#### c 類土器（第38図5, 9）（第43図12～21）

磨消繩文が横走するものを一括した。色調は赤褐色で、胎土は雲母片・砂粒をわずかに含むが、よく精選されており、小型土器で殆んど含まれていないものもある。磨消繩文は、太い沈線によって多段の紐状になって横走するものと、16～18, 21のように幅広の磨消繩文を曲線的に走らせたものもある。20のように外面を無文研磨し、内面に平行沈線文を施したものもある。19のように多段の紐状磨消繩文を横走させ途中で切ったりするものもある。21のように弧線を連続したものもある。第39図9は注口土器の注口部である。

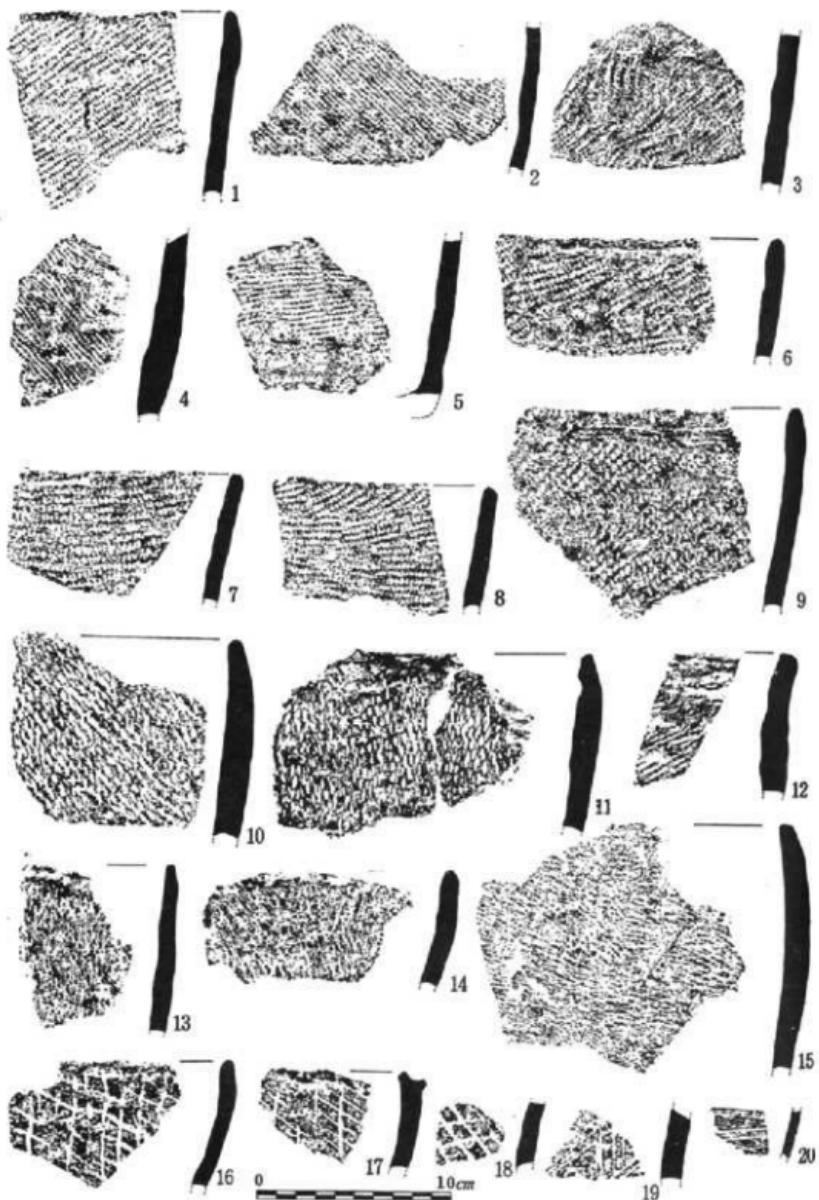
### 粗製土器（第44図）

以上の4群の土器に含めることの難しい、いわゆる粗製土器を一括した。分類して述べておこう。

#### a 類土器（第44図1～9, 12）

斜繩文を有する土器である。全般に褐色または暗褐色である。胎土は概して雲母片・砂粒を多量に含み、雜である。器面の調整もやや雜である。焼きはやや良くない。いくつかに分けられる。器形はいずれも平らな口縁がやや開く円筒深鉢であり、底部近くは厚手である。

- (イ) LR無節原体を横位に回転施文したもの（12）。第Ⅱa層出土である。
- (ロ) LR・RL単節の燃りのきつい原体を横位に回転施文したもの（1～2）。第Ⅱb層出土である。
- (ハ) LR単節原体を口縁では横位に、体部では縦位に回転施文したもの（3～5）。第Ⅱa層出土である。



第44図 八幡原No.31遺跡 土器拓影図(6)

(c) 節の粗いL R単節原体を口縁では横位に、体部では縱位に回転施文したもの(6~9)。第Ⅱa層より第Ⅰb層にかけての出土である。

#### b 類土器 (第44図10~11, 13~15)

撫糸文を有する土器である。全般に暗褐色である。やはり胎土は雲母片・砂粒を多量に含み、雜である。器面調整は雜で、焼きもあまり良くない。器形は平らな口縁のやや開く円筒深鉢である。体部下半にいくにつれ厚手となる。二つに細分できる。

(i) RL単節の撫糸文を有するもの。縱位回転施文である(10~11)。第Ⅱa層出土である。

(ii) LR無節の撫糸文を有するもの。縱斜位回転施文である(13~15)。第Ⅰb層出土である。

#### c 類土器 (第44図16~20)

格子状沈線文土器。色調は褐色で、胎土に雲母片・砂粒を少々含むが、器面調整は悪くない。焼きも普通である。器形は平縁の外に開く深鉢である。口唇に一条の溝を有するものもある。二分できる。いずれも第Ⅱ層出土である。

(i) ヘラ状工具により大きな格子目を呈するもの(16~18)。

(ii) 竹管状工具により不整な格子目を呈するもの(19~20)。

### 底部について (第45図5~6)

以上の4群と粗製土器の底部は今のところ明確にされていない。しかし、全般的には次のような特徴をあげることができる。即ち、着地中央がやや高くなっている。また、木の葉文の底部、網代の底部が比較的多い。

### B 土 製 品 (第十二図版2, 第46図1~3)

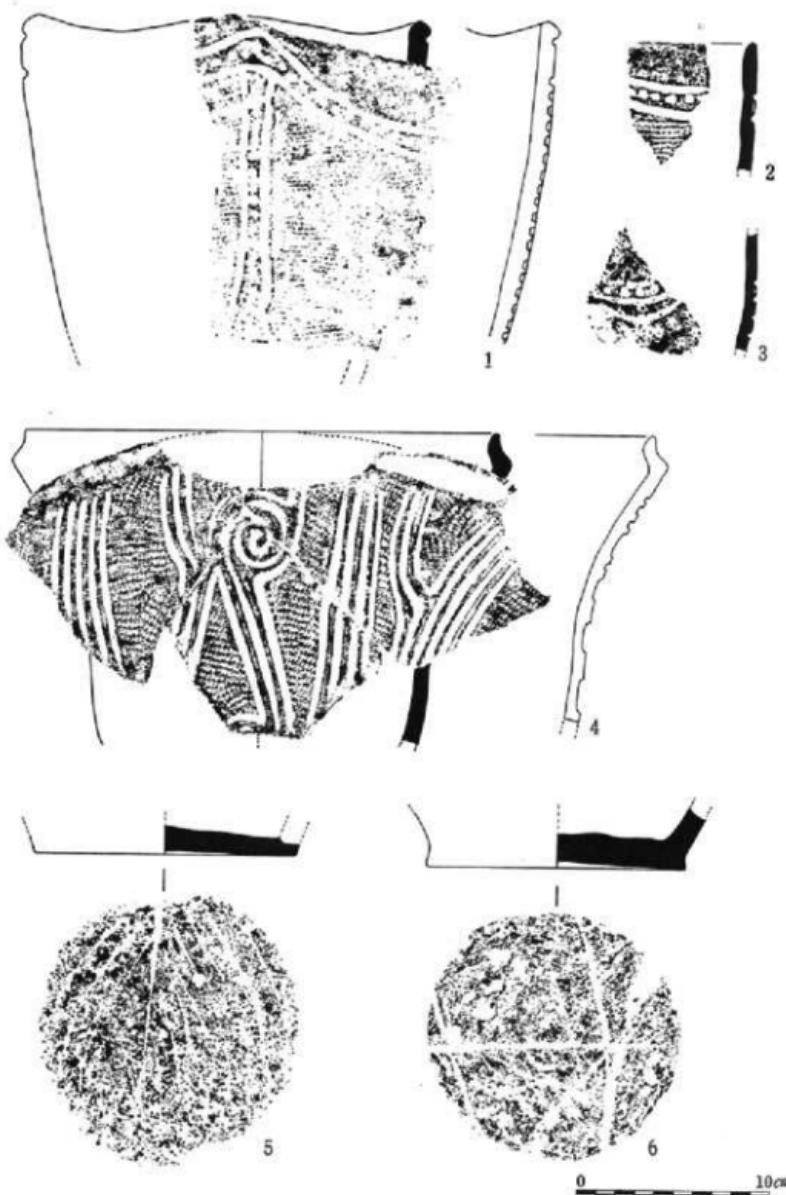
土製品には土偶、土錘、滑車形耳飾がある。いずれも量はない。1点ずつである。

#### a 土偶 (第46図1)

現存部分が顔面の中央である。ハート形土偶の顔面にあたり、扁平である。しかし、鼻高で、マスクは良いほうであろう。黄赤褐色で、胎土は良く選ばれている。焼きもいい。

#### b 土錘 (第十二図版2, 第46図2)

赤褐色に良選された粘土で焼かれている。長円形のものに十字の溝を切ったものである。第Ⅱa層のピット上面より出土している。



第45図 八幡原No31遺跡 土器拓影図(7)

## c 滑車形耳飾り（第46図3）

黄赤褐色で、雲母片・砂粒をわずかに含んでいる。薄く固く焼かれている。

## C 石 器（第十二図版1, 第十四図版2, 第47図, 第48図）

石器は多種・多量にのぼるが、遺物整理が完了していないので、主なものにとどめたい。また時期・形態・製作技法等についても簡単にふれるにとどめる。

## a 石 材

石材は種類により異なる。凹石・磨石等は安山岩が多い。石鎌・石匙・打製石斧・石錐・スクレイバー等の打製石器は頁岩が多い。石材の性質をよく使いわけているように見える。また、黒曜石の石鎌・石核（第48図12）・剥片もみられる。いずれも小形であり、原石もそれほど大きくないと考えられる。産地との関係は不明である。

## b 形 態

## (1) 石 鎌（第十四図版2, 第47図1～4）

有茎のものと無茎のものに大別できる。無茎のものでは第図1のように決りが深く、肩部のところが張るものが多い。有茎のものでは、第図3～4のように菱形で下の二辺をつぶませた形態のものが出土している。

## (2) 石 匙（第47図5～6）

量は非常に少ない。両面加工のもの（第47図5）と二次加工が粗雑でつまみ部の作り出しがそれほど顕著ではないもの（第47図6）とにわけられる。後者は石匙とすべきかどうかについて多少問題はあるが、この中に入れた。2, 3点ある。

## (3) スクレイバー（第47図7～10）

打面やバルブの部分に二次加工を施したもの（第47図9～10）や手で持ち易いように握り部分に二次加工を施したもの（第47図7）などがある。前者は本遺跡では多くないが、技法的に特色がある。

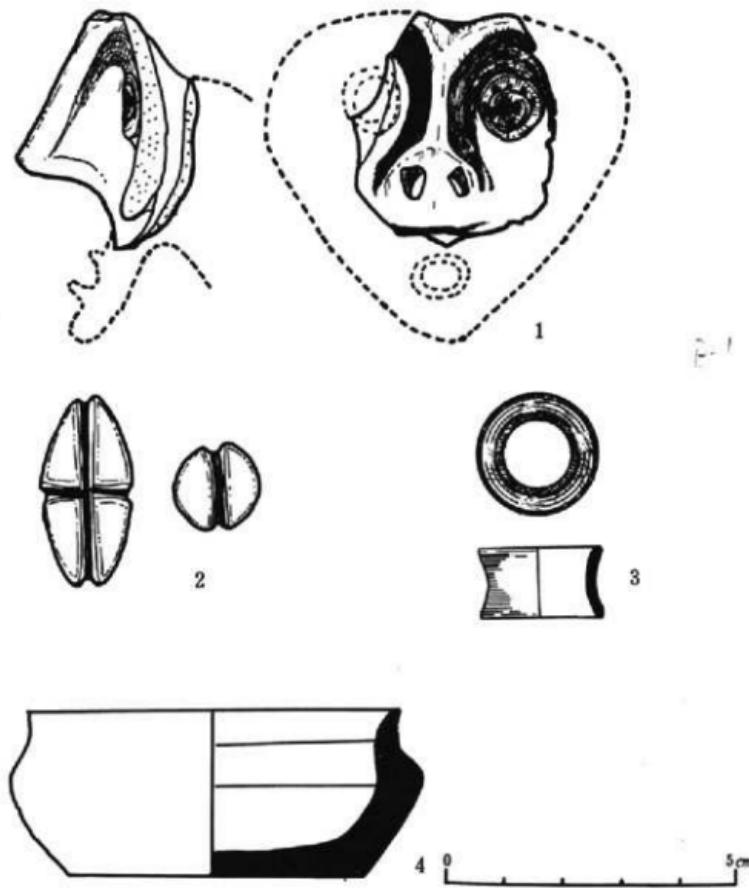
## (4) 石 锥（第47図14～15）

出土量は少ない。一般に細い棒状のもので、断面が四角形である。

## (5) 打製石斧（第48図1）

分銅形と橢形（第48図1）がある。縁辺がつぶれているものが多い（図の矢印部分）。一般に裏面の刃部がへこんでいる。

石核は8点ほど得ているが、材質により大きさが異なる。黒曜石のものは小形で、頁



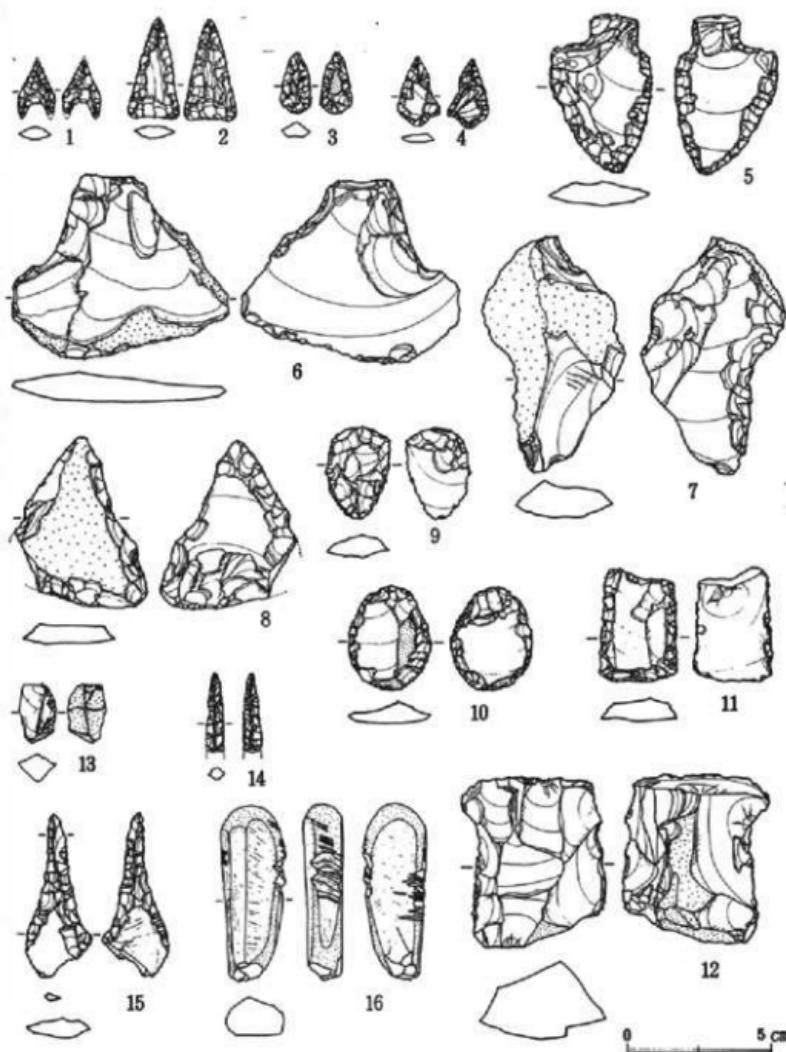
第46図 八幡原No.31遺跡 土製品実測図

岩のものは大形である。小形の石器の材質・大形の石器の材質とほぼ同じ傾向を示している。また剥片が多量に出土しているが、刃部に使用痕をもつものが多い。

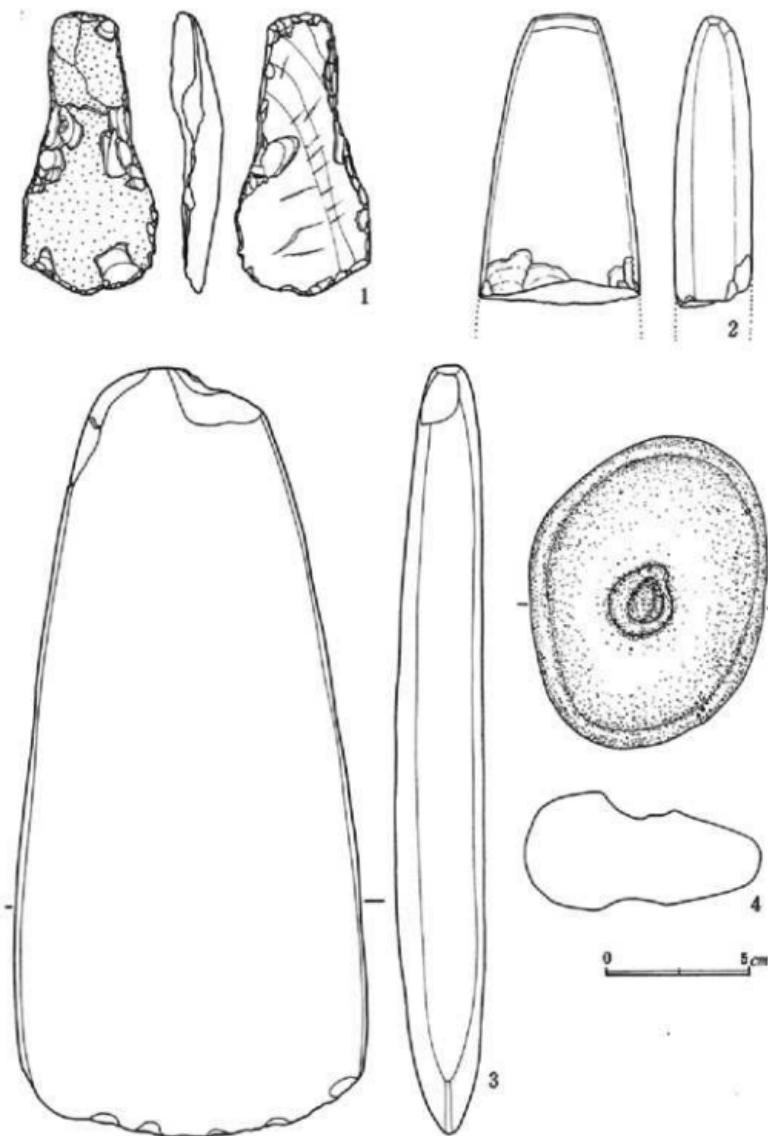
(6) 磨製石斧 (第十二図版1. 第48図2~3)

短冊形が殆んどである。10数センチメートル前後のものが大部分であるが(第48図2), 30cm近い大形のもの(第48図3)が2点ある。

(7) 回 石



第47図 八幡原№31遺跡 石器実測図(1)



第48図 八幡原No.31遺跡 石器実測図(2)

凹みが片面のものと両面のもの（第48図4）がある。量はいずれも多い。

## D 石 製 品

### (1) 三角形垂飾品（第十四図版1）

隅丸の二等辺三角形の板状を呈する。底辺両端に穴をもち、紐を用いれば逆三角形に垂飾する、ペンダント様のものである。石材は粘板岩である。全面よく磨研している。

### (2) 細長磨石製品（第47図16）

細長い自然石を磨いて側面に刻みを施している。用途不明。

## 7 ま と め

14グリッド・56㎡にわたる調査の結果、以上の三遺構と多量の遺物を得ることができた。これより本遺跡がどのような遺跡か明らかになった。そして後期縄文式土器編年研究資料も多量に得られた。その要点と問題をあげて本稿のまとめとしよう。

1、縄文時代中期末より後期初頭に至る時期の三遺構を確認した。これにより本遺跡が立石遺構や配石遺構を伴う集落跡であることは明らかである。各遺構の時期も伴出土器が得られ概ね明らかである。溝状遺構（第Ⅱb層、第3群土器）、立石を伴う住居跡（第Ⅲa層、第2群土器）そして配石遺構（第Ⅰb層、第3群土器）である。しかし、いずれも覆土を充分におさえておらず、住居跡では壁を確認していない。立石を伴う住居跡は、この時期において類例が多い。県内では、鶴岡市谷定遺跡の例（渡辺1970 P.20）がある。これらの類例を考えれば壁を充分におさえられなかったことは残念である。また、配石遺構は、木炭の分布・焼土・ピットそして六角柱の棒石を考えれば、立石遺構と関連が深そうである。これを明らかにすることは今後の課題である。

2、多量の遺物を概ね層序にしたがって採集できた。とくに後期縄文式土器編年研究の立場からは有効に用いたいことである。しかし、本遺跡の包含層は薄く、上層のものと下層のものを有効に分け得るかどうかは疑問の余地がある。貝塚等の良好な包含層とは区別して用いなければならない。

3、土器は一応4群に分けられる。第1群土器は出土状況からみても単一にまとまっている。縄文時代中期末大木10式土器に相当するものである。第2群土器は、第Ⅲa層より得られ、関東の堀之内1式に併行するものであることはまちがいない。堀之内1式の要素を多くもち一見そのものもあるようにもみえる。しかし、神矢田第3群土

器（佐藤・佐藤 1971 P.16）および宮戸Ib（後藤 1961 P.45）等とも共通した要素もある。第3群土器は、第IIb層より得られた。撚糸文・渦巻文等大木式土器の伝統が強くあらわれている。神矢田第3群土器および宮戸Ib式に併行するものである。第4群土器は第IIa層より得られた。a～b類土器は神矢田第4群土器に相当する。堀之内I式併行であると考える。c類土器は神矢田第4群土器～第5群土器に相当するものである。土器について一応このように述べたが、まだまだ吟味すべき問題を多く含み、その点で今後に残された課題が多い。

4. 土製品としてハート形土偶・滑車形耳飾り・土鍬を得た。いずれも資料が少ないので今後の研究に大いに役立つと見られる。

5. 石器は、石鎌・石匙・スクレイバー・石錐・打製石斧・磨製石斧・磨石・凹石を得ている。量的には意外と少ないのが石匙と石錐である。石鎌はこの時期特有の形態を有する。スクレイバーには打面・バルブをとるような二次加工を施すものがみられた。打製石斧では縁辺をつぶし、刃部をへこませ、機能的な形態（土掘具として）が多い。また、大形の磨斧も類例のない新材料である。今後の研究課題は多く残っている。

6. 石製品としては、三角形垂飾品の発見が注目された。類例が少ない。

以上をもって調査の概略の報告を終えるが、この調査において指導助言をいたゞいた方、実測図作成に労苦をいとわなかった手塚 孝・秦 昭繁・中嶋 寛氏他協力をいただいた方々に深く謝意を表したい。なお、できる限り早く本報告を行いたいと考える。

（佐藤鎮雄）

#### 参考文献

- 佐藤鎮室・佐藤鎮雄（1971） 神矢田遺跡 遊佐町教育委員会
- 後藤勝彦（1961） 「陸前宮戸島里浜台墳貝塚出土の土器について」 考古学雑誌 XXXXW-I
- 渡辺正機（1968） 「鶴岡市谷定遺跡調査概報－縄文時代後期の遺跡－」 庄内考古学 第7号

## 第4節 №.24（堂森H）遺跡

### 1 調査の経過

八幡原周辺の遺跡群は、地元に居住する手塚 孝・秦 昭繁氏らによって知られることになったものが多いが、№24遺跡もその一つである（手塚・秦・安彦1972）。

1970（昭和45）年6月末、手塚 孝氏によって、弥生時代の土壙1基とそれに伴う土器・菅玉等多量の遺物が発見された。手塚氏は土壙を含む一帯を「堂森H遺跡」と呼んでいる。この発見は、山形県内の弥生時代の遺跡が極めて少なく、また出土状況から土壙が再葬墓として考えられることから、当時われわれの注目をひいた。同年10月、加藤 稔を団長に山形大学学生を中心として堂森遺跡発掘調査団が作られ、発掘調査を実施した。発掘調査の目的は、具体的には(1)再葬墓群の確認、(2)弥生式土器編年の把握の2点であるが、その背景には東北地方南部における水稻農耕の開始と性格内容の解明という重要な問題を含んでいる。なお、この発掘調査については、土器を中心とした報告がなされている（横尾1973）。

調査は1970年10月4日～11日までの8日間にわたって実施した。

### 2 遺跡の概要

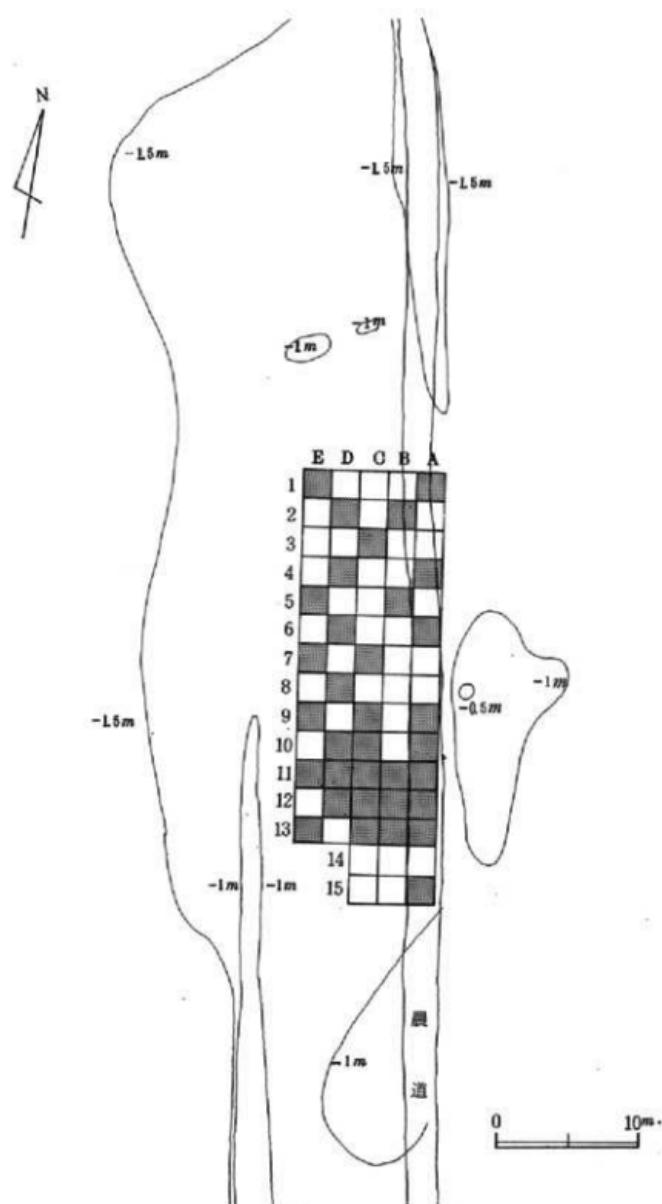
№24遺跡は、山形県米沢市大字牛森字八幡原5277-14ほかに所在する。米沢市万世町堂森の部落の北東約370mに位置し、旧八幡原飛行場の跡地にあたる。地目は現在水田・畑・雜木林となっており、遺跡は雜木林の間を縫う農道の西側に広がっている。すぐ近くにはきれいな湧き水がある。標高は約277m、農道から西側にかけてなだらかな傾斜をもつ。遺構はこの中でも比較的高い所に集中するようである。

遺跡の調査は、所期の目的に添ってグリッド発掘方式を採用した。農道を基準にして南北30m、東西10mの発掘区を設定し、発掘区画内は2m×2mの各グリッド毎に分割した（第49図）。南北方向を1～15、東西方向をA～Eとし、グリッド名はたとえばB-13区のように表現する。各地層の断面図は、A・D列の西壁およびB列の南壁をとった。

発掘面積は34グリッド、約136m<sup>2</sup>にわたる。

### 3 層序

遺跡における層序は、おおよそ4つに分けることができる。第1層—黒褐色表土、第2層—黒褐色微砂、第3層—暗褐色砂質土、第4層—灰黃褐色砂質土である。第1層は第2



第49図 八幡原No.24遺跡地区剖面図（1970年度調査）

層の黒褐色砂質土が耕作ないし植物の根などによって擾乱されたものである。第2層は遺物を包含し、有機質分を多く含む。第3層は第2層と第4層との間の漸移層で、黄褐色砂質土に有機物が浸透して形成されたものと考えられる。第3層にも遺物が少量含まれている。第4層は無遺物層で、遺跡の中で比較的標高が高い地域は黄褐色の砂ないし砂礫層が広がり、標高が低い地域は灰褐色の砂質粘土が分布する。遺構はほとんどが第4層を掘り込んで営まれており、中でも黄褐色砂質土を掘り込んでいるものが多い。なお、遺構には一部第3層からの掘り込みが認められるものもある。

#### 4 遺 構

今回の調査では、調査区南側A～C-10～12区の東西・南北とも9m四方の範囲に、遺構が密集して発見された。検出された遺構は、土壌10基、小穴（ピット）16個の計26にのぼる。以下順に主な遺構について説明する。

##### 〔第1号土壌〕

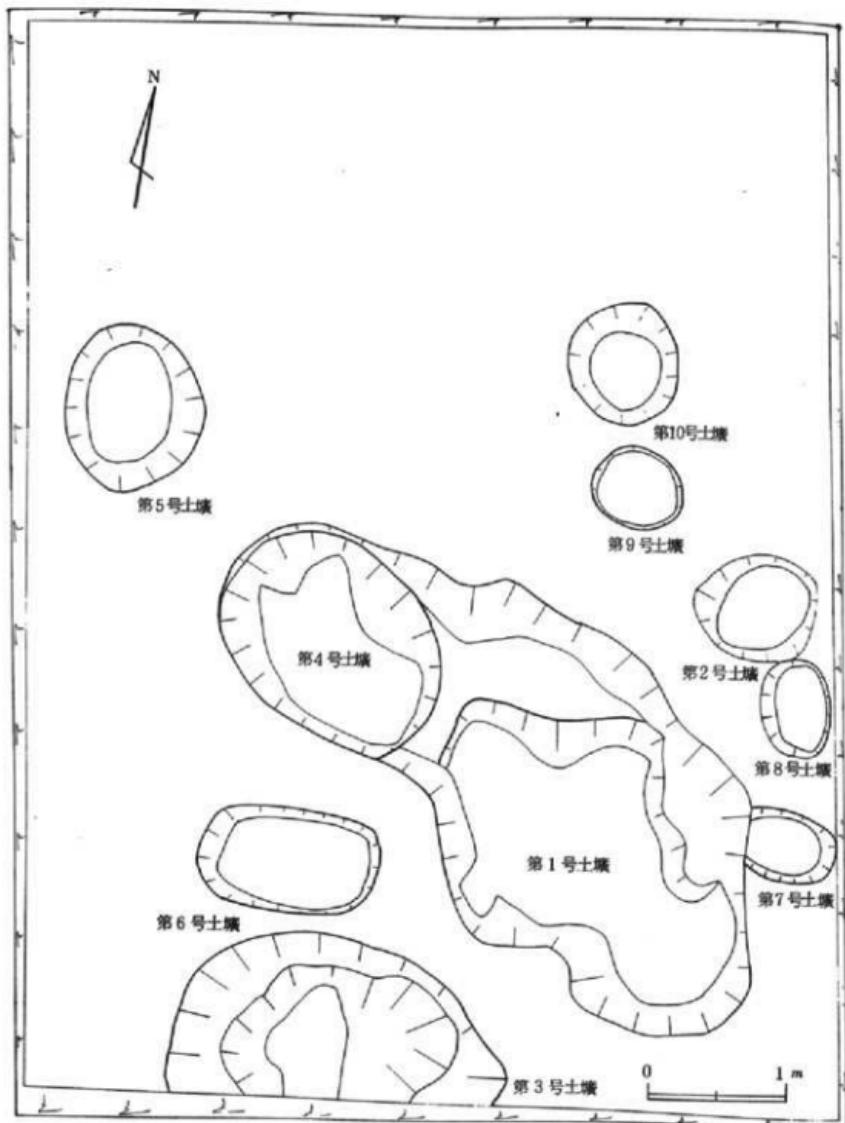
手塚 季氏によって一部試掘された土壌で、A-11・12区を中心に広がり、今回の調査で検出された土壌ではもともと大規模なものである。東西の長さ約240cm、南北の長さ190cm、深さ90cmを測り、形状は不整の梢円形を呈する。遺構は第3層一暗褐色砂質土および第4層一黄褐色砂礫を掘り込んで作られている。底面は凹凸があるがほぼ皿状を呈する。

土壌内の埋土は、黒褐色～暗褐色の砂質土層と黄褐色の砂ないし砂礫層が、土壌上面から墳底に向かって不規則に堆積している。前者は遺物を多量に含む包含層であり、後者は無遺物層である。

本土壌の特徴は、埋土の堆積状態にある。まず遺物を含む黒褐色砂質土を埋めた後、黄褐色砂質粘土ないし砂を埋め、さらに遺物を多く含む暗褐色砂質土を埋めている。最下層の黒褐色砂質土層からは、後述する壺形土器と蓋形土器がセットを成すように横だおしとなって発見され、壺形土器の底部には穿孔が施されていた。上層の暗褐色砂質土中には多量の土器片と菅玉・石器が出土地しているが、土器片は約8個体分、菅玉は18個、石器は石鏡3点、石匙1点その他石核状のものと剝片がある。

土器はすべて弥生式土器で、器形は壺形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器の4種類あり、壺形土器が大半を占める。

なお、発掘の進行過程において、第1号土壌の掘り込みは第4号土壌に重複することがわかったが、切り合い関係からみて第4号土壌が後に掘り込まれたものと思われる。



第50図 八幡原Na24遺跡遺構配置図（1970年調査）

## 〔第2号土壤〕

第1号土壤のすぐ北東側に発見され、東西80cm、南北47cm、深さ33cmを測り、ほぼ円形を呈する。埋土は三層に分かれ、上層が黒褐色微砂層、中層が黄褐色砂質土層、下層が黒褐色砂質土層である。遺物は上層から壺形土器片30点、剥片数点が出土している。

## 〔第3号土壤〕

第1号土壤の南西部に発見され、東西236cm、南北検出径100cm、深さ59cmを測る。第3号土壤の南側は未発掘に終わったが、形状はほぼ橢円形を呈すると思われる。埋土は黒褐色微砂の単一層で、周辺が緩やかに傾斜し中央が深く落ち込む。

土壤内からは遺物の出土が少なく、土器の細片4点が発見されただけである。

## 〔第4号土壤〕

第1号土壤の西側に隣接して発見され、東西170cm、南北125cm、深さ34cmを測り、橢円形を呈する。埋土は二層に分かれ、上層が黒褐色砂質土、下層が灰褐色砂質粘土である。

遺物はすべて上層より出土し、土器が壺形土器、攢形土器、鉢形土器の破片約100点、石器が石錐1点、剥片数点が出土した。

## 〔第5号土壤〕

第4号土壤の北西部に発見され、東西95cm、南北116cm、深さ21cmを測り、ほぼ円形を呈する。埋土は黒褐色微砂の単純土層である。

遺物は壺形土器の破片23点出土した。なお、本土壙の周辺に6個の小穴が弧状に検出された。何らかの外部施設に關係するものかも知れない。

## 〔第6号土壤〕

第1号土壤の西側に発見され、東西120cm、南北70cm、深さ35cmを測り、形状はほぼ橢円形を呈する。埋土は黒褐色微砂の単純土層である。

遺物は壺形土器片8点、磨製石斧片1点、石錐1点が出土している。

## 〔第7号土壤〕

第1号土壤の東側に隣接し、第1号土壤によって西側が切られている。東西約75cm、南北50cm、深さ9cmを測り、橢円形を呈する。埋土は黒褐色微砂の単純土層である。

土壤内からは土器等の遺物の出土はみられなかった。

## 〔第8号土壤〕

第2号土壤と第7号土壤の中間に位置し、東西52cm、南北68cm、深さ26cmを測り、形状は橢円形を呈する。埋土や出土遺物は不明である。

## 〔第9号土壙〕

第2号土壙の西側に位置し、東西58cm、南北57cm、深さ32cmを測り、形状はほぼ円形を呈する。埋土や出土遺物は不明である。

## 〔第10号土壙〕

第9号土壙の北側に発見され、東西80cm、南北90cm、深さ32cmを測り、形状はほぼ円形を呈する。埋土は二層に分かれ、上層が黒褐色微砂、下層が黄褐色砂質土である。上層より弥生時代の壺形土器片数点が出土した。

## 5 遺 物

今回の発掘調査において出土した遺物は、土器・石器・管玉などである。以下順に説明を加える。

今回の発掘では、完形土器もあわせて約1200片の土器が出土している。また以前手塚孝氏が試掘されたものもほぼ今回の出土量と同じ位ある。これらのうち今回の発掘調査で出土した土器については、調査団の1人横尾秋子が発表しているので、以下これに準じて説明を加える（横尾 1973）。

出土した土器はほとんど弥生時代に属するものであり、出土地点による土器型式の差異は認められないようなので、ピットの枠をはずしてすべてを1グループとして一括分類する。

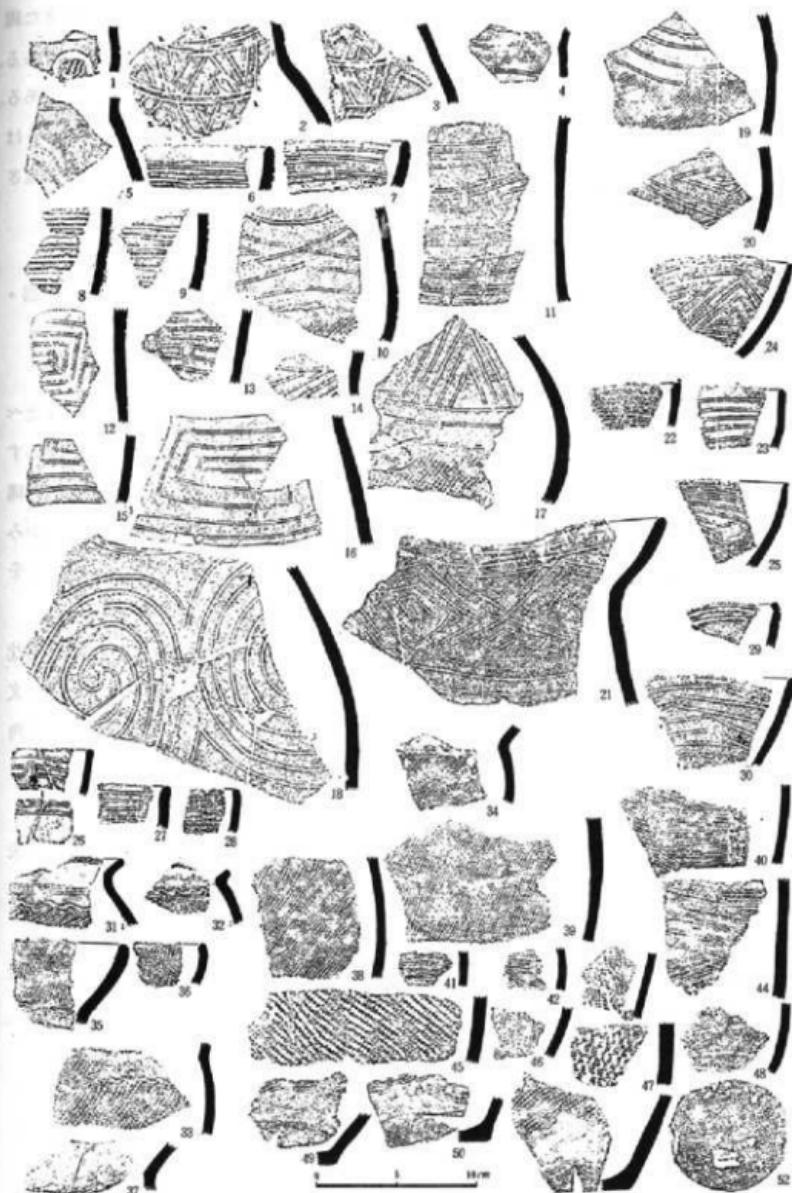
これらの土器は、さらに文様構成によって磨消繩文を有するもの=A群土器、沈線による文様を有するもの=B群土器、繩文または撚糸文を有するもの=C群土器=の三種に分けることができる。各群土器はさらに器形によって、壺形土器・鉢形土器・蓋形土器・甌形土器等に分かれる。

## &lt; A 群土器 &gt;

A群土器は、磨消繩文手法による文様を有する土器群であり、本遺跡では他のB・C群土器に比して極めて少ない。

すべて幅1~2mm程の範描き沈線によって区画を施し、その区画内に比較的細い繩文が見られるものである。磨消繩文については次の二つの施文手法がうかがえる（須藤 1970）。

- a 繩文を地文として全面に施し、その後に沈線の区画し、さらに区画した一部を範などで磨いて繩文を磨り消す手法。
- b はじめに沈線で区画し、その後に沈線の区画文中を繩文で充填する手法。



第51図 八幡原No.24遺跡出土土器拓影（横尾 1973より）

第51図2・3は後者の手法によるものである。両者の手法によって結果としてできた縄文帯の文様には、山形文・矩形文・渦巻文などがある。器形は壺形土器がほとんどである。第51図2・3は第1号土壇から出土したもので、壺の頸部から肩部にかけてのものである。この土器は焼成が悪く、非常にもろい。縄文帯の部分が朱彩されている。第51図4・5はほぼ同じ文様構成であり、体部の渦巻文と頸部の付け根の間に磨消繩文状の縄文帯が施されている。焼成が良好で、やや表面に光沢がある。

## &lt; B 群土器 &gt;

B群土器は、籠描き沈線手法による文様を有する土器群であり、器形によって壺形土器・鉢形土器・蓋形土器に分かれる。

## (壺形土器)

本遺跡の出土土器の大部分をしめるもので、加飾が他の壺形土器・鉢形土器などに比べて著しい。第52図1は第1号土壇から出土したもので、文様構成は丸味を帯びた内わんする頸部に6本の平行沈線文が施され、胸部上半には沈線による重三角文が、下半には斜繩文が施されている。底部には焼成後に穿った孔があり、体部内外には数個の羽の圧痕がみられる。山形県地方での最古の粗底土器である。この壺は第52図の2蓋形土器とセットを成すように横おしとなって発見されている。

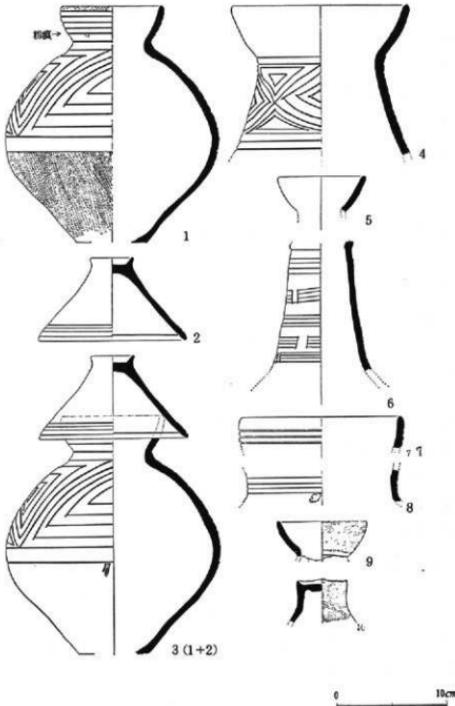
壺形土器の文様は、①平行沈線文を有するもの（第51図6～9）、②3～4本の平行沈線の両端をとじたものを交互に施し文様を有するもの（第51図11）、③沈線による方形文（第51図12・13・15・16）、④沈線による山形文（第51図10・18）、⑤沈線による重三角文（第51図14）、⑥沈線による山形文（第51図17）、⑦沈線による菱形文（第51図20）に分けられる。以上7種類の文様が壺形土器の各部分に文様帶として位置する。

壺形土器は、研磨されたものが多く、特に渦巻文や方形文は、一つおきに研磨または朱彩されているのがほとんどである。朱彩は胸部下半にも施されているものがある。

壺形土器は、頸部の形態によって①頸部が長いわゆる長頸壺、②頸部の短い短頸壺、③①、②の中間の形態をとり、丸味を帯びた頸部から引続いて頸部が自然に立ちあがる壺の三種類に分けられる。

## (鉢形土器)

完形品の出土がないため、はっきりした形態は解らないが、口径・傾きからして浅鉢の形をとると思われる。口縁部直下から体部にかけて、平行沈線が重三角文が施される（第51図22～30）。器厚は薄手で、焼成は良好である。



第52図 八幡原№24遺跡出土土器実測図（横尾 1973より）

## (壺形土器)

本遺跡では、完形品が1点（第52図2）出土しただけであるが、鉢形土器と分類した中に壺形土器も一部含まれているかも知れない。蓋の把手にあたる部分は中央部が落ち込み、茶碗の糸尻のようになっている。口縁部下に4本の平行沈線が施され、裏面にも1本の沈線がある。口縁部内外約1cmほどの部分に炭化物が付着している。

## &lt;C群土器&gt;

C群土器は、繩文または撒糸文を有する土器群であり、器形によって壺形土器・壺形土器・蓋形土器に分れるが、小片等はいずれに属するか不明のものが多い。

## (壺形土器)

完形品はなく、口縁部付近の破片だけである。体部と頸部の境に屈曲を有し、口縁部が強く外反するのが特徴である。頸部に窓調整を行ない、体部との境に繩文原体の結束部を回転して付けた綾織文を有する。口唇部にも繩文が施されている。体部には全面斜繩文ないし撒糸文が施されるが、繩文の中には単節繩文のほかに、附加繩文と呼ばれる、繩文の単節ないし複節原体にさらに織維質のものを巻き付けた技法がみられることも注目される。

## (壺形土器)

小片が多いため壺形土器と区別して明らかに壺形土器に伴なうと思われるものは、すべて口縁部から頸部にかけてのものである。第51図33・34は壺形土器の口縁部で全面に細い単節斜繩文が施されている。全面に朱彩の認められるものもある。体部下半につくと思われる繩文は、細かい単節斜繩文や附加繩文が多いが、比較的粗い単節斜繩文の例（第51図45）もある。撒糸文は、網状文に近い不整のもの（第51図42・43）と、非常に細かい整ったもの（第51図48）の二者がある。

## (壺形土器)

繩文のみを有する例は1点だけである（第52図10）。細かい斜繩文が施され、把手の部分は上げ底になっている。

以上で土器に関する説明を終えるが、最後に壺形土器・壺形土器の底部について少し触れておく。底部破片には、布目圧痕を有するものと、簡単に窓で磨いただけのものがある。布目圧痕にも極めて緻密なものから比較的大目のものまで多様である。今回発見された土器のうち底部そのものが残っているものは18個あるが、うち布目圧痕のみられるものは10個ある。

## (石 器)

出土した石器には、石鎌・石槍・石匙・磨製石斧・凹み石・磨り石・その他石核・剥片などである。今回の調査では伴出した土器がすべて弥生式土器であるため、多くは弥生時代に伴なうものと考えられるが、なお繩文時代に比定すべき遺物もある。<sup>①</sup>

石鎌は7点出土している。6点が頁岩質で1点は石英質である。石鎌の形態は1点のみが無茎でその他の有茎である。第1・3・4号土壙より出土している。土壙内出土の石鎌は、基部の抉りが強く綾輪が横幅に比して著しく長いものや、尖端に抉りを有するものが見られ、当地方における繩文時代晚期終末の伝統をもつている。また、基部が独特の形を有しアメリカ型石鎌と呼ばれ、弥生時代に盛行するものもある。

石槍は長さ8cm、幅2.8cmの両面を丁寧に加工した尖頭器様のものが1点出土している。石材は頁岩、同じく1号土壙内の出土である。

石匙は下半部が欠損しているが綫に長いものである。石材は頁岩、同じく1号土壙内の出土である。繩文時代晩期に属する。

磨製石斧・凹み石、磨り石はすべて土壤外からの出土である。凹み石は4点出土しており7~15cmほどの安山岩質の川原石でできている。

## (管 玉)

すべて1号土壙から出土したもので、今回の発掘調査で6点、手塚氏の試掘で12点の計18点が出土している。濃~淡緑色を呈する碧玉製の管玉である。今回発掘した管玉だけについて言えば、長さは120~195mm、太さは4.8~8.0mm、孔の大きさは18~28mmと多様であるが太形の管玉はみられない。なお、破碎された管玉はみられず、すべて完形品である。管玉の表面はきれいに磨かれているが、内に磨いた痕跡がいくつかの面となって残り、製法の一端がうかがわれるものもある。穿孔方法は両面から鋭利な道具で穿孔したものである。

## 6 ま と め

以上№24遺跡の1970年度調査について説明を行なってきたが、最後に簡単なまとめを行ないたい。

本遺跡は、その土器型式からして、福島県の柏山・陣場遺跡などに多く類似点が認められ、さらに宮城県の円田遺跡にも類似する。一部「南御山II式」に比定できるものもあるが（第51図2・3）、その多くは東北南部における土器型式である「円田式」ないし「柏

「山式」土器に併行すると考えられるものであり、弥生時代中期末から後期初頭に位置するものであろう。

山形県において類似する土器は高島町一ノ沢岩陰遺跡にわずかに例をみるが、まとまって出土したのは本遺跡が初めてである。従来空白とされてきた中期前半「棚倉式」併行土器と後期「桜井式」併行土器の中間に位置する好資料を得たことにより、山形県下の弥生式土器の研究は一つの転期を迎えたと言える。

本遺跡は後述するように弥生時代の再葬墓と考えられることから、器形の量比において豪形土器が卓越し、一般的な集落跡とはかなり異った様相を示すが、またそれゆえに同一土壌内の出土土器は比較的短期間のものと把握することが可能である。すでに本遺跡の弥生式土器を一括して「堂森式」とする試みもある（横尾 1973）が、その詳細についてはなお慎重を期したい。

つぎに遺構とくに土壌について若干のまとめを試みる。土壌は合計10基発見されたが、それらの土壌は、形態・埋土・出土品の様相から二グループに大別することができる。一つは、第1・4号土壌であり、もう一つはその他の土壌である。後者の土壌は大きさが1m前後で深さが浅く、埋土も單一層ないし2~3層である。伴出土器も少ない。第3号土壌だけは平面形が大きいが、主となるのは内側の土壌であり、その外面は緩やかなおち込みであることを考慮する必要がある。

これに対し、前者の第1・4号土壌は、規模も2m前後と大きく、遺物を多量に包含する。特に第1号土壌の埋土の堆積状態は、明らかに、人為的に埋めたものと解釈され、遺物も完形の壺・鉢を中心とする。

東日本における弥生時代のこの種の土壌は、一般に洗骨を主とする再葬墓と考えられているが、第1号土壌下層の合わせ口壺の出土状況は、これを裏付けるものであろう。また、後者の第2・3・5~10の8つの土壌も再葬墓に密接な関連を持つものと推定される。第1号土壌の包含層は、二層に分離することが可能であり、上層に遺物を多く含むことを合わせ、後者を一次埋葬土壌、後者を二次埋葬のための集骨墓とは考えられないであろうか。今の段階で軽々しく結論づけることは出来ないが、興味ある資料である。（佐藤 庄一）

注

① 後述する1974年度発掘調査で縄文時代名時期の土器が発見されたことにより、石器の一部は縄文時代のものが混在していることも考えられる。例えば、第51図1のように、縄文時代中期末の土器片が散点見られた。

② 米沢市万世町神所の寺代遺跡がそれで、同遺跡からは縄文時代晚期大洞B.O.C1,A,A'式併行期および弥生時代初頭の良好な石器群が発見されている。

③ 杉原莊介氏の説による（杉原1967「群馬県岩礁山における弥生時代の墓址」考古学雑誌3-4ほか）。

## 第5章 八幡原遺跡群の性格(予察)

### 第1節 分布と立地

#### 1はじめに

すでに述べたように、八幡原周辺でこれまでに明らかにされている遺跡群は、44を数える。No.40遺跡（牛森古墳）しか確認されていなかった10年前には想像もしなかった数である。手塚孝・柴田繁ら豊賀考古学会員の調査研究の賜物である。しかし半數近くの遺跡が時期・性格がいままで明確でないことは残念のことである。調査團が結成され、調査を進めている現段階においてそれを明らかにすることは今後の第一課題と考える。だがそれを明らかにするには奮闘を行わねばならない状況である。

今後調査團の手によりこれらの遺跡が何らかの形で調査されるとみられるが、その調査にあたって留意すべきことがある。それは、個々の遺跡を地域の他に遺跡や他地方の遺跡との関わりの中でとらえることである。緊急調査が盛んな現今、ともすれば個々の遺跡調査で止まってしまいかがちである。

幸いにも米沢八幡原中核工業団地造成予定地発掘調査團はその意味で恵まれたフィールドを与えられている。梓川扇状地という1単位の地形に営まれた遺跡群である。本稿はすべての巨視的課題に係ることはできないが、一部についてこれら遺跡群の性格を予測しようというものである。それが今後の調査の作業仮説にプラスされるものと思う。

#### 2 遺跡分布の特色

まずこれら44遺跡を地形図に記してみると（付図參照）。その結果、第3章でふれたとおり遺跡はいくつかの群をして分布していることがわかる。すなわち、次のとおりである。

- (1) 金谷地区（造成予定地外であるが）に群在する。「金谷遺跡群」とよぼう。
- (2) 堂森地区より八幡原一帯に群在する。「堂森・八幡原遺跡群」とよぼう。
- (3) 上竹井地区より梓川（天王川）対岸の木和田横山にわたってやや多数散在する。「上竹井遺跡群」とよぼう。

- (4) 烧山東部の牛森辻の堂地区に少し散在する。「焼山東部遺跡群」とよぼう。
- (5) 牛森地区周辺に少数散在する。「牛森遺跡群」とよぼう。

以上の(1)~(5)のうち、(1)~(3)までの遺跡の時期・性格の明瞭な大遺跡が核となって密度が濃い。(4)~(5)は逆である。したがって分布の中心は、金谷遺跡群・堂森・八幡原遺跡群

～上竹井遺跡群を結ぶ、金谷～堂森～八幡原～上竹井～木和田～横山の各地にあるといえる。その意味で名づければ『八幡原遺跡群』とでもいえる。

### 3 遺跡立地の特色

八幡原遺跡群と周辺に散在する遺跡を地形図に記せば、やはり第3章でもふれたように大きな特色がみられる。梓川扇状地の地形的な特徴、つまり側面の山々、現河川、湧泉とその流路の分布・弧状の連続する等高線・残丘をみれば、明らかに梓川扇状地の扇端部および湧泉や小支流にそって遺跡が分布するのである。さらに微視的にみれば、扇端部の湧泉、小支流にそった微高地および梓川の段丘上の微高地に遺跡が立地しているのである。一口で言うならば、水の便に恵まれた微高地ということになる。このような立地のところが選ばれた理由は単純に説明できない。時代・時期による生産形態や社会背景の差異もふまえねばならない。

それにもしてもこのように見事に扇状地の輪郭を遺跡分布によっておさえることができる状況は注目に値する。山形県内では、村山地方に典型的な類例を多く挙げられる。主な例として乱川、立谷川、馬見ガ崎川の各扇状地における遺跡分布をあげることができる。これらの例では、遺跡の時期が縄文時代中期～弥生～平安時代に主体をおいている。ところがここでは縄文時代に主体がある。すなわち、水稻耕作に基盤をおく生産形態をもつ遺跡と狩猟採集に基盤をおく生産形態をもつ遺跡との差異がある。扇状地扇端部の豊富な水の得られる立地は、初期水稻耕作期の必然性をもった立地ではあるが、狩猟採集期の必然性を有する立地とはならない。もっともこのような単純な考え方には問題はある。

### 4 遺跡の時期別分布の特色

これらの遺跡が同時に営まれたものでないことは一見して明瞭である。そこで遺跡の営まれた時代・時期について整理してみると第6表のとおりである。この表から縄文時代以前を除く殆んどの各時代にまたがっていることがわかる。縄文以前ということは扇状地に立地する地形ではあり得ない。問題は時期による区分である。時期区分による分析を行うと遺跡の営まれたピークがわかる。それはつぎの時期である。

- (1) 縄文時代早期より前期初頭にかけての時期。6遺跡
- (2) 縄文時代前期末の時期。6遺跡
- (3) 縄文時代中期より後期初頭にかけての時期。8遺跡
- (4) 縄文時代晚期より弥生時代中期にかけての時期。3遺跡

### 5 平安時代後半の時期。6遺跡

以上により梓川扇状地の扇端部を中心とする地域には、縄文時代以降断続的な形で遺跡が営まれてきたことがわかる。そしてその最盛期が(3)の時期であることも。

### 5 置賜地方東南部の遺跡と比較

立地と分布についてとくに時期毎に置賜地方東南部の各遺跡と比べてみると、どのような特色が得られるであろうか。

縄文時代早期末期初頭の時期は、置賜地方では比較的遺跡が多い。東北に連なる奥羽山系西線の丘陵地や西南に連なる西吾妻連峯北線の丘陵地に散在する。遺跡としては高畠町の洞穴遺跡群や和田地区の原遺跡等である。遺跡の増加傾向は共通するが、立地としてはここでは扇状地扇端部である。立地の違いが何に基くのかは不明であるが、特徴的である。

縄文時代前期末もやはり遺跡の増加する時期である。置賜のみならず山形県内一般にいえることである。米沢市の台の上・普門院・丹南等の各遺跡と高畠町の尼子・日向・一ノ沢等の各遺跡がある。いずれも丘陵地に立地するが、早期末よりはかなり平地に近づく傾向をもっているようである。やはり立地的に異なっている。

縄文時代中期末後期初頭は、一般に遺跡が減少する傾向をもつ時期である。置賜地方東南部でも同じで米沢市の大塚山、一本橋、高畠町の鳥取山洞穴、南陽市の金沢山の神等数えるほどしか遺跡が見当らない。しかしここでは逆に遺跡が増すのである。そして各時期の中で最も多くの遺跡数をあげ得るのである。また立地は先述の遺跡とこここの遺跡と共に通する。すなわち、丘陵地の平地に近い部分や扇状地の「湧泉」に近いところという立地性を満しているのである。したがって、この時期の遺跡としての立地にいかに恵まれていたかがわかる。

縄文時代晚期末弥生中期の時期は、一般にこの地方では遺跡数が非常に少ない。梓川上流の庄代や北方の高畠町神立洞穴・鶴音岩洞穴等のわずかしか知られていない。ここでも少ないのである。しかし、故宮坂善助氏採集の遺物の中にはこの時期のものとみられる石器がいくつかまじっている。まだわれわれが未確認のこの時期の遺跡があるのであろう。それについても、そう多くはないと思われる。立地的には扇状地末端の「湧泉」に近いところで、乱川扇状地等の場合と共にしているが、前記の遺跡とはやや異なる。

古墳時代の遺跡が二つあるが、古墳時代前期の集落跡と末期（奈良期）の古墳である。これらは山形県内二大古墳地帯の一つの置賜東部古墳群地帯と関連する。やや古い土師器

第6表 時期区分による八幡原遺跡群一覧（佐藤 1975）

年 代 ( 西 暦 紀 元 前 後 年 代 名 称 )	工業化地盤成文化および周辺の遺跡（遺跡ナンバー）																																														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43				
B.C. 10000																																															
B.C. 7200-5500 (E. 23)																																															
B.C. 5000±200 (E. 10)																																															
B.C. 2200±300 (E. 5)																																															
B.C. 1000±300 (E. 2)																																															
A.D. 300																																															
A.D. 700																																															
A.D. 704																																															
A.D. 1197																																															
A.D. 1320																																															
A.D. 1665																																															
A.D. 1887																																															

の出土する遺跡は南陽市に松沢古墳が確認されている。その意味でNo.43遺跡は稀少価値を有する。また、古墳としては置賜東部のものはほとんどが末期（奈良期）に属するものである。No.40遺跡はこれら古墳群地帯の最南端に位置する。立地的にはほとんどの古墳が丘陵地にあるのに対し、No.40遺跡は平地の古墳である。果して清水前古墳群のように古い様相をもつかどうかは不明である。

平安時代は山形県でも遺跡が増加する。とくに後半は著しい傾向をもつ。置賜地方でも同様である。ここでもその傾向がある。立地的には古窯跡とそれに直接結びつく集落以外はいずれも「湧泉」に近い平地の微高地に遺跡が集中する。ここでも同じである。

## 6 まとめ

『八幡原遺跡群』は、杵川扇状地末端の湧泉地帯の微高地を中心にして断続的に営まれた遺跡群である。縄文時代を主とし、それ以降を副として営まれている。いずれも「湧泉」に近い立地を選ぶという特色をもっている。このような扇状地末端を中心にした遺跡群の例は、山形県内にもいくつかあげられる。しかし横浜早期～後期にかけての時期の遺跡がこれほどこのような立地のところに集中する例はかつてみられなかった。それゆえに、遺跡分布と立地の背後にある、生産形態・社会背景等の研究の格好のフィールドとなっている。最上川流域全体の分布と立地の特色をおとそえて比較するなどもっと詳細で広い視野からの吟味検討を行う必要もあるが、單なる乗直分布や立地の論理では割り切れない性格を有する。集団領域や單一地形内の有機性のことも考えて、個としての遺跡、群としての遺跡を考える必要があるとみられる。このような立場に立て今後の調査を進めるならば、眞の意味での調査研究になると確信するものである。遺跡を営んだのは人間である。遺跡自体が有機物であることを忘れてはならない。

## 第2節 地域相

前節で述べたところと多少重複するところもあるが、八幡原遺跡群をふくんでの、米沢盆地東南部の原始・古代文化の地方色といったものをさぐってみたい。

旧石器時代末の日本は、大きく南北二系列の細石刃文化におおわれていた。山形県地方は、新潟県方面から北海道北東部までをふくむ東日本を分布圏とする荒尾系の文化圏に属し、それはさらに北方大陸に連絡する。

これにつぐ中石器時代の遺跡群は、白竜湖低湿地帯の東北部の丘陵中に、岩陰・洞穴遺跡としてみられる。九州にはじまつた土器製作は、山形県の米沢盆地東北部の岩陰遺跡群にまで急速に及んだがその北は明らかでない（加藤 1969）。一方、この時期、北海道から新潟県までをふくむ広い地域では、有舌尖頭器の一一種である立川型尖頭器を特色とする人々が住んでいた。陸経文土器群の分布する北限の地域であり、かつ立川型尖頭器の分布する南限の地域である。山形、新潟、群馬にまたがる比較的狭い地域には、小瀬が沢型尖頭器が点々と発見されているが、これらと土器との共伴関係はまだ証明されていない。最も古の陸経文土器は、米沢盆地を北限として、それより北へ伝えられることがなかったのかもしれない。米沢盆地はまずそうした地域として理解される必要がある。

縄文時代への過渡期にあらわれる撚糸文土器以前の縄文土器群は、やや北へ範囲を拡大し、岩手県北の竜泉新洞遺跡にまでびているが、その中心部が中部地方から東北地方の一部——小瀬が沢型尖頭器の分布範囲とはほほ重なりあう。ここでも米沢盆地は一つの特色ある地域としての性格をもっている。

つづく撚糸文土器は、関東を中心に中部～東北地方の一部——米沢盆地へ及んでいる。縄文時代早期初頭の遺跡もまた盆地東北部の岩陰・洞穴として見出される。彼らが好んで採った動物群は、ヤマドリ、カモノハシ、サギ、ハクチョウなどの鳥類、イノシシ、ノウサギ、アナグマ、タヌキなどの哺乳類であった。大谷地の水壓地帯をちかくにひいた山岳地帯という環境と、そこに育てられた生活技術をみることができる。縄文や撚糸文をもつ土器群やこれにつづく無文土器群はそれ以外の地では発見されていない。日向の撚糸文土器は稱荷台式に、また押型文土器は日式に類する（柏倉・加藤 1967、加藤 1967、加藤・佐々木 1962など）。

縄文時代早期の中葉には、日本がふたつの土器分布圏に分けられる。関東地方から東には沈縞文土器群が分布している。

縄文時代早期の後半、貝殻文土器群の登場するに及んで、米沢盆地周辺に遺跡の広がりがみられる。南陽市須刈田遺跡からは、太い横位の沈縞文をもつ尖底土器が得られている。これは南関東の田戸下層式に対比されるが、その様相は新潟県室谷洞穴出土のものに類する。日向洞穴や尼子岩陰をはじめとする高畠町岩陰・洞穴には、田戸上層式にあたる貝殻文・沈縞文土器群がみられ、一部に北奥の様相はみられるものの、大よそ大寺式にふくまれ概して関東の様相が強いといってよい。つづく貝殻条痕文土器群のうち、古手のものはやはり高畠町の岩陰にみられる。櫻木I式の範疇でとらえられる。新しい手のものが、八幡原No.33遺跡で良好な資料が得られている。櫻木II式に類する（秦 1973）が、やはり関東的な様相が強い。早期の末葉には、この地域に土器の胎土に植物の纖維を混入させる手法がひろがり、貝殻条痕文や縄文がほどこされ、平底土器も出現する。しかし、大石田町庚申町遺跡の例にならっていえば、縄文前期初めの飯坂町小白川遺跡や米沢市堂森B（No.26）遺跡の出土土器の底部はまだ丸底であるかもしれない。

縄文時代前期。早期にみられた東西二大文化圏の対立がくずれ、地方色をみせる土器によって日本列島は大よそ六区にわかれる。東北地方南部には大木式土器の一群が分布する。この範囲はほほ暖帯の落葉樹林帯と重なり合い、自然環境への適応とともに、占有領域などの社会環境の形成も進んだことを暗示する。

縄文時代前期初頭の遺跡が多数発見されていることは米沢盆地の特色の一つである。米

沢市内には台ノ上、成島、音門院、松原、湯ノ沢、一ノ坂、細原（No.33）、堂森B（No.26）、堂森F（No.25）の9遺跡が数えられ、さらに川西町に小松と相馬山の2遺跡がある。高畠町にはさらに9遺跡がある、これまでに20の遺跡がすでに知られている。これらのうち、松原遺跡の土器群は、つぎの大木I式との間に位置する特徴をもつことが注目され、「松原式」と仮称されている（真室1972、赤塚1973）。いわゆる「ニッ木式」の様相を濃厚にもつ。なおまた、飯豊町野山遺跡でみられた北陸の施文（林1962）も注目される。

高畠町の岩陰遺跡と、米沢市成島、松原、細原（No.33）の各遺跡に大木I式の遺物もふくまれている。以後、この地域の土器群は、縄文中期末にいたるまで大木各型式の範囲でとらえられる。しかし、吾妻山中の前川流域の大森（洪川）開拓地、高野原A・Bの遺跡群からは関東の土器も発見され、とくに高野原B遺跡の獸面把手（柏倉1966）は諸磯式に特有のものとして注目される。また、大木6式期の完形土器群を出している堂森F（No.25）遺跡も注目に値する。縄文中期初頭へとつづくこの遺跡の土器群は、佐佐町吹浦遺跡の土器群の器形と共通する。こうした器形は青森県蟹沢遺跡など円形土器を出す地方にみられる。中期のキャリバー形深鉢の祖形ともみられる。堂森に円筒土器の直接的な面影はない。

縄文時代中期にも、大木系文化圏は継承される。しかしながら、縄文時代中期初頭の遺跡は、なぜか山形県内では數少い。堂森E（No.9）遺跡はその一例である。下野式的な色彩がやや見られるが、まだ対比できる資料が少い。大木7b～8a式期に盛行したいわゆる袋状ピットが、米沢市内吾妻町の台ノ上遺跡で発見されている（真室1972）。柄木県、福島県方面と連絡する。柄木県根木平遺跡のように、内部から炭化したシイ・グミ・ドングリの実が多数発見された場合があり、その構築の目的として食物の貯蔵穴説が有力である。真室は、台ノ上の場合について、遺跡（台地）の端（斜辺部）に住居跡（群）とは離れて、複数が密集していることや、他にも完形土器が上下に口を合わせて埋納された形で発見された例などを傍証しながら、埋葬に関する埋葬施設であろうとする。一考の要があろう。

この段階ではまだ、米沢市西部の成島遺跡に大量にみられる、三脚石器・三脚土製品の出現にも注目する必要がある。新潟県から秋田県までの、裏日本に濃密に分布するこの特異な遺物は、簡略化された土器としての用途を考案されており、縄文時代中期の呪術的社會を分析する有力な手がかりとなる。

中期後葉の特色として、複式炉をもつ住居跡の構築があげられる。堂森B（No.26）遺跡のほかに、米沢市南部の蘿遺跡でも多数発見されている（亀田1974）。残念ながら両

第7表 東北地方南部と対比した米沢市の原時代縄年表(安政1972に改変)

年代	文化層別	地名	出土品名 (G)	新潟市周辺の該当地名
1400年代	中 石器	日 朝 I 大 鎌 I 一 一 日 田	日 朝 I 大 鎌 I 一 一 日 田	新潟市周辺の該当地名
1300B.P.	8.000B.P.	尼 尼子 I 日 例 V 尼 尼子 I 大 霧山 I 上川山 I	尼子 I ノルニ ノルニ 尼子 I 霧山 I 霧山 I	新潟市周辺の該当地名
6.000B.P.	6.000B.P.	白 不 例 入浴器	白 不 例 入浴器	新潟市周辺の該当地名
4.000B.P.	4.000B.P.	小 白 川 河 木 2a 大 木 2a 大 木 3 大 木 4 大 木 5 大 木 6 大 木 7a 大 木 8a 大 木 9 大 木 10	白川 河内 木山 木山 木山 木山 木山 木山 木山 木山 木山	新潟市周辺の該当地名
2.100B.P.	2.100B.P.	白 水 1 水 2 水 3 水 4 水 5 水 6 水 7 水 8 水 9 水 10	水 1 水 2 水 3 水 4 水 5 水 6 水 7 水 8 水 9 水 10	新潟市周辺の該当地名
1.700B.P.	1.700B.P.	白 水 1 水 2 水 3 水 4 水 5 水 6 水 7 水 8 水 9 水 10	水 1 水 2 水 3 水 4 水 5 水 6 水 7 水 8 水 9 水 10	新潟市周辺の該当地名
1.300B.P.	1.300B.P.	白 水 1 水 2 水 3 水 4 水 5 水 6 水 7 水 8 水 9 水 10	水 1 水 2 水 3 水 4 水 5 水 6 水 7 水 8 水 9 水 10	新潟市周辺の該当地名
4.000B.P.	4.000B.P.	白 水 1 水 2 水 3 水 4 水 5 水 6 水 7 水 8 水 9 水 10	水 1 水 2 水 3 水 4 水 5 水 6 水 7 水 8 水 9 水 10	新潟市周辺の該当地名

遺跡とも部分的な調査であるため、堅穴住居跡の全貌を詳かにしていない。他の類例からみて、埋甕を住居の中心とするほぼ円形のプランが予想される。複式炉をもつ堅穴住居跡は、山形県全域に広がっており、福島県地方を中心に新潟県方面にもみられる。上原型複式炉の発達地域の中でとらえられる。時期は大木9~10世紀である。今後なお巨大炉の展開過程と人口集中地域の移動現象とを解明すべき課題を負うている。

繩文時代後期の遺跡としては竹井B (No.31)、金谷A (No.5)、一本橋などがあるが、やはり全体としての遺跡数の減少の傾向は、米沢盆地でも指摘できる。猿野町ノ内遺跡で地中炉を中心とする4本の主柱がある梢円形の住居跡が確認されている。この駒ノ内遺跡は、繩文期の一種の古跡跡とする考えがある(柏倉1966)。「その三方が崖となり、水田(湿原)に囲まれ、その水田からの比高が2~3m、後方(西側)の山と連なる個所に一条の浅い空堀(幅2m)が設けられてある。精査したところ、繩文土器以外の土器は空堀からも堅穴住居跡内外からも出土しなかった上に、空堀の底(地盤)から出土した土器片は、住居跡出土のものと一致し、繩文後期に属するのである。このような状態から考えると駒ノ内遺跡は、繩文期にさかのぼり得る古跡跡であった。その初原的な例であるといえよう。おそらく山麓台地に数個の堅穴住居跡があり、空堀・断崖によって区画され、一段低い湿原には湧き水があるという環境であったろう」と。果してどうであろうか。

この時期の後半、東北から関東へかけては粘土粒を外側にはりつける貼漉文土器が地域の特色をしめしている。そして、土器の分布図は、中期と比較してみると、かなりの移動が目立ち、とくに東北地方土着の土器分布の拡大が注目される。そうした傾向は、繩文時代の終期にいたって、早期と同じように日本列島に東西二つの土器分布図を対立させることになる。東日本は亀が岡式土器の分布図である。

繩文時代晩期の遺跡もまた極くかかる。そのうち、調査のおこなわれたものとして、丹南遺跡がある。晩期後半の亀が岡式土器を主とし、大洞C~A式期に属するが、特徴的な土器に浮線網状文をもつものがある。このような土器群は、飯豊町數馬遺跡でも見られ(山形県立博物館1973)、関東・新潟・福島県における縄文文化晩期末葉の色彩が強く見られる。こうした地域性は、古代遺跡など晩期末から弥生初にかけての時期にも濃厚にみとめられる。

米沢盆地の平坦部の弥生時代遺跡としては、壹代のほかに、堂森H (No.24) 遺跡があるのみでまだ調査が十分でないここに、再葬墓とみられる土壙群が数多く発見されている。その土器は、樹形匣式あり、円田式あり、南御山II式ありで多彩である。これらの土器群がほぼ同一時期に属することを明らかにしたこととなった。一方、再葬墓として蓋・壺を

副葬する（董棺？）土墳墓は、東海地方から東北南半の初期弥生時代にみられる風習である。堂森II遺跡はいまのところその北限とみられる。この時期に、米沢盆地の住民は、稻作農耕と金屬器・機械技術をもっていた（横尾 1973）。紀元後一世紀である。

弥生時代の後期にいたって、その生産は一層発展したと思われるが、なおその時期の遺跡は不明である。水稻の農業生産が一般化するのはつぎの古墳時代前期に入つてのようである。羽黒川沿いの冲積地にある堂森D（No.43）遺跡出土の土師器はかなりの地方色をもちながらも、やはり表日本古墳文化の影響を受けて成立したものである。頸部に円形竹管文の装飾が連続してめぐるものがある（伊藤1972 第11図）。この円形竹管文はおそらく円形浮文の転化であろう。壺の口縁部に付されることの多い円形浮文は、南関東の弥生式では棒状浮文ととしに付される場合がある、後期弥生式土器の流れをくんで、棒状浮文同様古式土師器の編年区分の主要な要素の一つとみられる（玉口1972）。こうした系統は古墳文化の流入の経路を暗示する（加藤 1973）。

中期古墳はおろか、後期古墳も米沢市周辺では見られない。しかし、北の戸塚山古墳群には、200基ちかい群集墳がみられ、その主墳は後期初にさかのぼる可能性が考えられる。今後の課題となっている。八幡原周辺に散見する積石塚のいくつかは、末期古墳であると思われ、その精査が期待されよう。積石塚は長野県方面に多く見られ、また岩手県南にも発見されている。陸奥国置賜郡の発展の過程は、こうした方面的資料の集積によって解明に赴くものであろう。

（佐藤誠雄・加藤 稔）

#### 参考文献

- 赤堀良一郎（1973）山形県地方における縄文前期初頭の編年の研究（上）－上川名II式の検討－  
工藤定雄教授還暦記念論文集 PP. 41-58 山形 其記念会
- 秦 昭雲（1973）米沢市細原遺跡出土の土器と石器について 山形考古Ⅱ-2 PP. 29-30
- 林 清作（1962）山形県野山遺跡の土器 考古学雑誌 XXXXVI-3 PP. 68-70
- 伊藤 忍（1972）堂森遺跡D地点出土の土師器 跡略考古3 PP. 42-43
- （鬼田 勉明）（1974）米沢平野農業水利事業普門院遺跡外3遺跡発掘調査報告 米沢 米沢市教育委員会・東北農政局米沢平野水利事業所
- 柏倉 亮吉（1966）古代の生活 吾妻通義 PP. 206-219 山形 山形県総合学術調査会
- 柏倉亮吉・加藤 稔（1967）山形県下の洞穴遺跡 日本の洞穴遺跡 PP. 51-65 東京 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会
- 加藤 稔（1960）関東北における後継式土器 歴史教育 XVII-4 PP. 27-39
- 加藤 稔（1973）最上川流域における古墳文化的展開 工藤定雄教授還暦記念論文集  
PP. 109-164 山形 其記念会
- 加藤 稔・佐々木洋治（1962）山形県一ノ沢岩陰遺跡 上代文化3L/32 PP. 33-47
- 真室 公一（1972）米沢市<松原遺跡>発掘調査報告 跡略考古3 PP. 1-6
- 真室 公一（1972）米沢市「台の上遺跡」出土の袋状ビット 跡略考古3 PP. 18-20
- 玉口 時雄（1972）古代土師器小考 -福島県いわき市平原高野遺跡調査報告- 東洋大学文学部紀要25 PP. 243-262
- 山形県立博物館（1973）山形県飯豊町白川ダム水没遺跡発掘調査報告書 数馬遺跡 山形 山形県教育委員会
- 横尾 秋子（1973）米沢市堂森遺跡出土の弥生式土器 工藤定雄教授還暦記念論文集 PP. 57-82 山形 其記念会

## 第6章 要 約

すでに見たように、工業団地予定敷地 430 ha は、東・南・西の三方に角を突き出した形をしていながら、その敷地内に、26地点に及ぶ遺跡群を蔽している。その内、すでに調査された 4 遺跡は、調査の主体も調査の時点もそれぞれ違っている。いわば at random の調査であった。それでいて総括的に示してくれることは、この地域に、縄文期の早い頃から江戸期にいたるまでの数千年にわたる文化の長い継続があったこと、各遺跡がそれぞれ異なりながら、また、程度の差をもちながら、何らかの学問的な問題を提示していること等である。4 遺跡以外の遺跡群についてもまた、それぞれに追求にあたいる価値を期待したのであった。面積は広い。遺跡の数が多い。時間的な制約は厳しい。しかし、これらの古い文化の遺跡群がこれから造成せらるべき Industrial Park の中に、生き在りし日の生活を語り続けるであろうことを思いながら、悔なき調査を行おうと、われわれは心に決めたのであった。

(柏倉 亮吉)

## 第Ⅱ部 各論（その一）

## 第1章 昭和49年度発掘調査の経過

八幡原中核工業団地造成予定地 430 ha には、山形県文化課の分布調査によって計24カ所の遺跡の所在が認められた。これらはその所在する位置と、推定されている時期とからつぎのように区分することができる（第8表）。すなわち、24カ所の遺跡は、

1 八幡原遺跡群	10
2 上竹井地区遺跡群	7
3 牛森辻ノ堂地区遺跡群	3
4 細原橋周辺遺跡群	2
5 牛森桑山地区遺跡群	2

を数えることができるが、これらを二・三の特徴的な性格づけをするならばつぎのようによく測ることができる。

八幡原遺跡群は、梓川の扇端部に濃密に分布する遺跡群の西半分にあたるもので、縄文時代から弥生時代にかけての、ほぼ全時期を通じての集落の跡と見なせる。従来のわれわれの知見によれば、例えば山形盆地の乱川扇状地の扇端部には、縄文晩期から弥生中期の遺跡群が（加藤1970），立谷川・馬見ヶ崎川扇状地の扇端部には、弥生中期から古墳時代の遺跡群が群在する（柏倉・武田・加藤1968）。そして、扇尖部の川岸立ちかくに縄文前・中期の遺跡が散在するという傾向があった。これに対し、八幡原遺跡群には、縄文晩期の遺跡がこれにあたるかもしれないが、むしろ縄文時代早・前期の遺跡が特徴的に存在する。縄文時代早期の遺跡は、その初頭のものは東置賜郡高畠町から南陽市にかけての山間部に、その中葉のものは、北村山地方や東南置賜地方、東田川地方の山間部に、そして末期のものが山形県内のいくつかの河川の河岸段丘などに立地しており、扇状地上で発見された例はなかった（山形県1969ほか）。ここに、八幡原遺跡群を調査するにあたっての留意すべき点がある。しかも、調査團がここでもっとも力を注ぐべきと考えたのもこの地区的こうした性格の遺跡群であったのである。

つぎに上竹井地区の遺跡群は、梓川扇状地の東半部にあたるもので、一部縄文時代に属し、主として歴史時代の遺跡がみられる。そして、この傾向は、牛森辻ノ堂から細原橋周辺、牛森桑山にかけても共通する。大まかにいえば、梓川扇状地の扇端部には縄文時代遺跡が濃く分布し、扇尖部には奈良・平安時代を中心とする歴史時代の開拓の様相が観察されるのである。

## I 昭和49年度発掘調査の筋緯

第8表 八幡原遺跡群の地区別特色

(■印:昭和49年度調査予定遺跡)

	1 八幡原遺跡群	2 上竹井地区に 点在する遺跡	3 牛森辻ノ堂地 区の遺跡	4 細原橋周辺の 遺跡	5 牛森堀山にかけ ての地区的遺跡	延 計
編 期	No16 (慶治清水B) No25 (八幡原A) No26 (八幡原B)	No33 (横山A)				(4)
	No18 (清水北B) No25 No26	No33				(4)
	No16 No25 No26	No31 (竹井境B)				(4)
	No16	No31				(2)
文 詳	No15 (慶治清水A) No17 (清水北A) No19 (清水北D) No20 (横山下) No24 (八幡原C)		No35 (長 堀) No36 (辻ノ堂A)		No41 (井ノ鼻)	(8)
	No18 No24					(2)
弥 生	No18 No24					(2)
古 墳			No40 (牛森古墳)			(1)
歴 史	No27 (上竹井) No29 (玉ノ木B) No30 (竹井境A) No32 (竹井境C) No34 (横山B)	No36 No37 (辻ノ堂B)	No39 (細原前川原)	No42 (原ノ上)		(10)
計	1 0	7	3	2	2	24(35)

従来、奈良・平安時代の土師器を出す集落跡の調査は、東根市小林C遺跡（小林遺跡発掘調査団 1975）などの少數例をのぞいて、主として水田になっている沖積低地で調査されてきた。これを扇状地扇部において実施することにはまた一つの新しい意味があると思われる所以である。

さて、八幡原中核工業団地予定地内の遺跡群の分布の傾向を以上のようにとらえてみた上で、限られた期間内により大きな成果を生み出すために、いずれを先にいずれを後にすべきかは多くの方策があるはずである。しかし、一方において造成が進行することが予想される段階では、その状況をもにらみあわせた計画をつくらねばならない。

米沢中核工業団地委員会（第4回、1974年6月）は、「米沢八幡原中核工業団地基本計画」で、団地内のはば中央に南北50m幅員の、東西30m幅員の幹線道路を建設することを創定した。造成の手はじめとし、桙川東部の切盛・バランシと用地内の幹線道路の建設、そしてこの作業のための作業用道路の設営がおこなわれる予定だとした。こうした幹線道路、作業用道路にかかる遺跡として、つぎのものが予想された。

東西道路：No18、19、23、24の各遺跡

南北道路：No35、36、37の各遺跡

したがって、昭和49年度にはこれら9遺跡をまず発掘調査の対象にすることとなった。そして、その発掘の日程をつぎのように計画し、途中一部修正を加えながら、7月30日より調査を実施したのである（第9表）。そのため、昭和49年度は、八幡原遺跡群の主要部の調査は見送ることとなった。これには、調査団の結成が年度途中であり、十分な体制を整えることができないという事情も考慮に入っている。

こうして、第1年次（昭和49年度）の発掘調査は三つの地区において実施することとなった。

① 細原橋周辺の遺跡群：No40（牛森古墳）遺跡を中心とする、作業道路関係。  
平吹利樹・加藤 稔ほか担当。

② 八幡原遺跡群のうち、東西幹線道路敷にかかるもの。 平吹利樹・佐藤庄一・尾形与典・舟山良一・手塚 孝・渋谷孝雄・東海林次男・加藤 稔ほか担当。

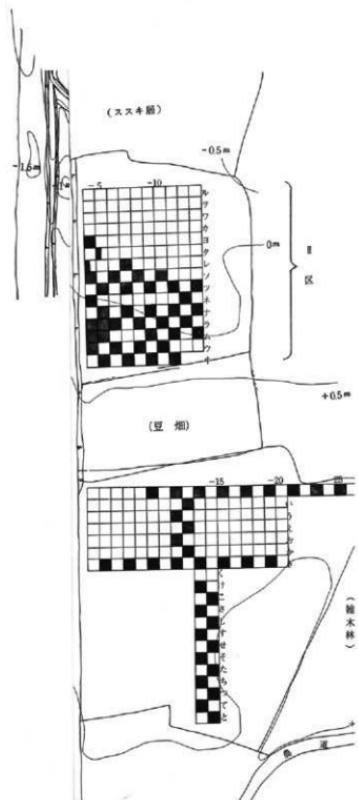
③ 牛森辻ノ堂地区的遺跡：南北幹線道路敷にかかるもの。 佐藤誠雄・佐藤正俊・加藤 稔ほか担当。

しかしながら、牛森古墳については、7月末日現在、未買収の状態にあり、その調査は

## I 昭和49年度発掘調査の経緯

第9表 八幡原中核工業団地内遺跡群の発掘調査計画図(昭和49年度分)

当初案		修正案		実施		摘要		
月日	期	発掘場所など	月日	期	発掘場所など	月日	発掘場所など	
7/24 I 8/18 (26日間)		No18 (1900 m <sup>2</sup> )	7/30 I 8/30 (32日間)		No39 (800 m <sup>2</sup> ) No40 (2100 m <sup>2</sup> ) + 2900 m <sup>2</sup>	7/30 I 8/2 8/3 I 8/13 I 8/16 I 8/17 I	No39、40の一部 No40の牛糞古 墳は、未買収 のため延期 No19着手 お盆休み No19(継続)	No40の牛糞古 墳は、未買収 のため延期 No24に着手 No19、24グリッド 面積 2832 m <sup>2</sup> No18、23、24グ リッド面積 1372 m <sup>2</sup> + 1488 m <sup>2</sup> + 4204 m <sup>2</sup> グリッド面積 3200 m <sup>2</sup> グリッド面積 6760 m <sup>2</sup> グリッド面積 8000 m <sup>2</sup> + 17960 m <sup>2</sup>
8/19 I 8/31 (13日間)	II	No23 (900 m <sup>2</sup> )	8/31 II 9/21 I (22日間)		No18 (1900 m <sup>2</sup> )	9/2 I	No24に着手 No19 (952 m <sup>2</sup> ) No24 (468 m <sup>2</sup> ) No18 (28 m <sup>2</sup> ) No23 (40 m <sup>2</sup> ) + 1488 m <sup>2</sup>	
9/1 I 9/17 (17日間)		No24 (1500 m <sup>2</sup> )	9/22 II 10/21 I 2 (30日間)		No19の一部 (2450 m <sup>2</sup> )	10/10 I	+ 4204 m <sup>2</sup>	
9/18 I 10/9 (22日間)	V	No25 (1800 m <sup>2</sup> )	10/22 II 11/2 I 3 (12日間)		No23 (900 m <sup>2</sup> )	10/11 I 10/24 I 10/25 I 10/31 I	No35 (216 m <sup>2</sup> ) No36 (172 m <sup>2</sup> ) + 804 m <sup>2</sup> + 17960 m <sup>2</sup>	
10/10 I 11/18 (42日間)		No26 (4000 m <sup>2</sup> )	11/3 II 11/26 I (24日間)		No35 (700 m <sup>2</sup> ) No36 (350 m <sup>2</sup> ) No37 (800 m <sup>2</sup> ) + 1850 m <sup>2</sup>	11/1 I 11/25 I	No37 (416 m <sup>2</sup> ) + 804 m <sup>2</sup> + 17960 m <sup>2</sup>	
			11/26 V			11/26 機材等整理		



要

の牛畜古  
未買取  
め延期

木み

グリッド

32 m<sup>2</sup>

23,24グ  
ド面積

72 m<sup>2</sup>

34 m<sup>2</sup>

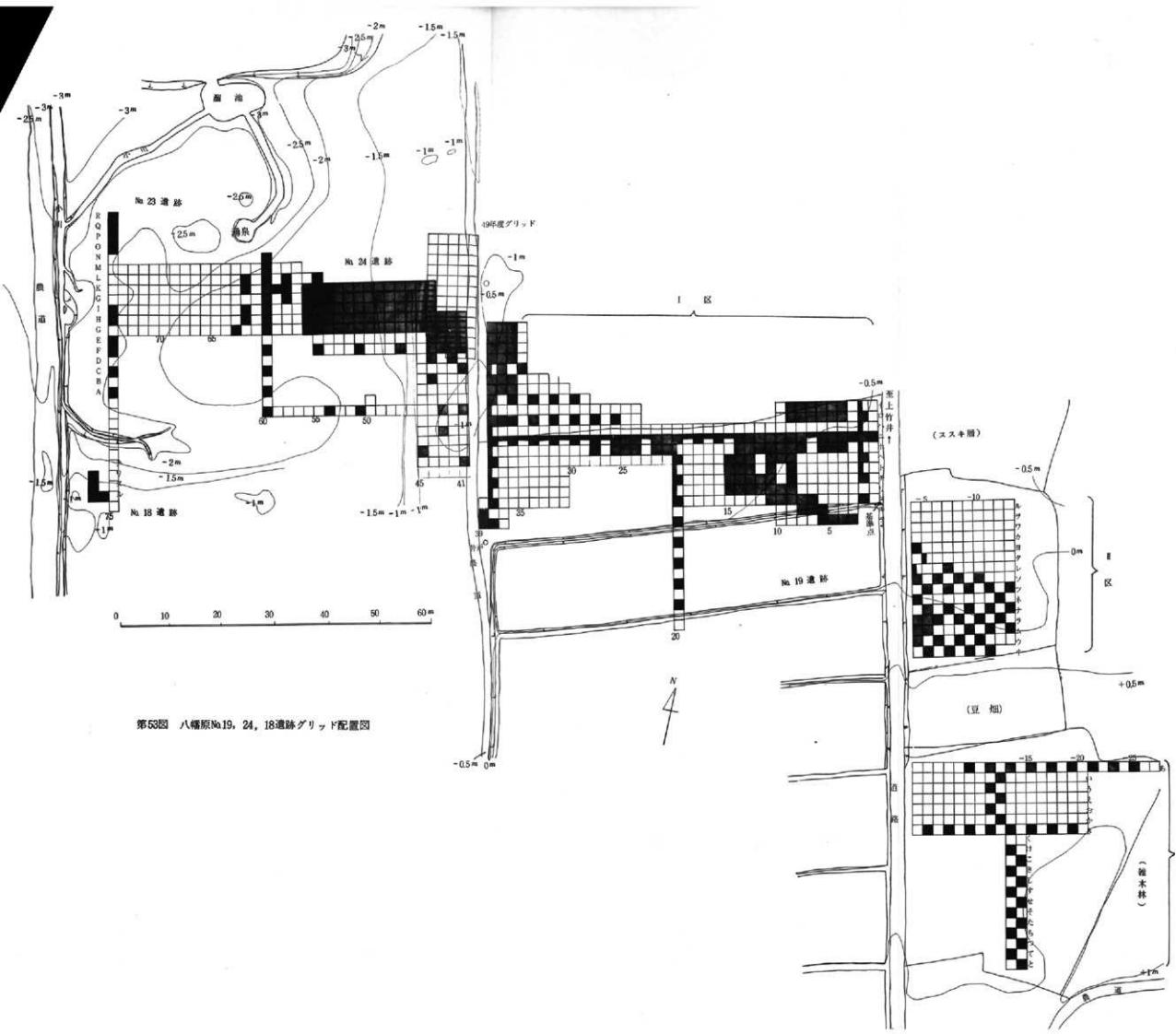
ド面積

10 m<sup>2</sup>

ド面積

10 m<sup>2</sup>

60 m<sup>2</sup>



翌年度にくり越さざるを得ず、主として②、③の遺跡群の調査に終始する結果となった。また、④の遺跡群はいずれも道路敷予定部分にのみ調査を行なったため、これについても翌年度に継続すべき部分を多く残した。

発掘面積のもっとも広がったのは、No.19遺跡である。その大半が畠地であるため作業は容易ではあったが、第Ⅰ区「ニー10」の土壌以外は競馬場スタンド跡や八幡原飛行場建設以前の地形を確認したにとどまり、分布調査によって推測した縄文時代遺跡としての性格については否定せざるを得ないものとなった。従来から採集されていた縄文時代遺物は、飛行場建設の際の埋土層からのものである公算が大きい。試掘を伴わない分布調査の欠陥が露呈された形となった。

一方、No.18、23、24遺跡の大部分は、樹林地であるために、発掘地の選定や樹木の伐採に多くの時間を費した。そして、道路予定地は、No.24遺跡の中心部を通り、No.18遺跡の北辺、No.23遺跡の南辺をかすめることが確認された。なお、No.19遺跡とくくったその西北部は、むしろNo.24遺跡の範囲内にふくめられるべきこと、またNo.23遺跡とNo.24遺跡との境界というものは割然とできるものではなく、複合遺跡というべきことも明らかとなつた。しかも、単純に弥生時代の墓地跡と考えていたNo.24遺跡内には、縄文時代早期、前期、中期、晩期、平安時代の遺構も重合していることが発見された。分布調査の資料からする予測といふものについて慎重な分析が必要であるとの教訓を改めて得たことになる。

牛森辻ノ堂地区の遺跡群でも、発掘調査した部分では縄文土器や土師器を主体とする時代の確実な遺構が検出できなかった。扇状地扇央部における遺跡の究明については、なお多くの体験を必要とするものと考える。

以下の各章において、第一年次において、とくに確実な遺構をとらえたNo.24遺跡を中心、調査地点の大要を報告することにする。

(加藤 稔)

#### 参考文献

- 柏倉亮吉・武田好吉・加藤 稔(1968) 島遺跡(山形市史別巻1) 山形 山形市  
加藤 稔(1970) 考古学からみた東根市 扇川扇状地 PP. 41-62 山形 山形地理学会  
小林遺跡発掘調査団(1975) 小林遺跡 東根 東根市教育委員会  
山形県(1969) 山形県史 資料篇II 考古資料 山形 山形県

## 第2章 八幡原遺跡群(1)

### 第1節 No.19 (清水北D) 遺跡

#### 1 遺跡の立地

この遺跡は東方の「牛森山」西方の「堂森山」にはさまれた海拔 258 m の平地にある。発掘前の現状は、北半分が畑地で、北端と東端が原野、南半分が水田になっており北に微傾斜している。

遺跡の範囲は遺物（縄文時代）の散布から抑えたもので、南北に約 120 m、東西約 110 m である。この地は第2次大戦中は飛行場であったが、敗戦直後に競馬場となり、その後民間払い下げを経て再び耕地となり現在に至っている。

#### 2 調査経過（第十五回版）

この遺跡内に工業団地内を東西に走る幅 30 m の道路が通り抜ける計画になっている。その道路予定地が遺跡の北部を横断するために発掘調査が行われた。

上竹井から牛森に通じる南北の道路の西線を基準線とし、南北に 124 m・東西に 108 m の範囲内に 2 m 四方のグリッドを設定し（第53回）調査をすすめた。No.19 の遺跡の北西に No.24 遺跡があり、グリッドの 1 個は No.24 遺跡内に含まれる。

道路西側の第1区は、用地買収直前はホップ畠であったが、現状は休闇地のため一面雜草が繁茂している。発掘以前に採取されている遺物の大部分は、この第1区から縄文時代のものである。調査は第1区から始められ、次に第2・第3区の順に行われた（写真1）。

#### 3 出土遺構

##### (1) 飛行場建設による埋め立て層

第1区の表土をはぎ地層を掘り下げたところ、飛行場建設以前の表土があらわされた。「ニ列」の断面をとったところ、「ニ-30」のグリッドの地区が最も深く、表土より -85 cm に達する（第55回）。元の地盤表面には腐植物層が各所にみられる。「ニ-27」には倒木も原型をとどめて残存している。「ニ列」の西方のグリッドの断面にみられる元表土の地層が泥炭化しているところから、飛行場建設以前は低湿地であったことがわかる。

埋土層の深いグリッドは「ト-4」と「ニ-22」を結ぶ線上と、「20列」から西方の地区である。このことは後述の「溝状遺構」と関係するものである。「20列」から西方は、

#### II 八幡原遺跡群(1)

以前は低湿地であったといえる。

##### (2) 溝状遺構（第十六回版）

第1区の「ト-4」から「ト-13」にかけて、表土より -50 cm の面に溝状の遺構が検出された（第54回）。上幅が約 1 m、底幅が約 50 cm、深さが 30 cm 前後のもので、「ト-4」から「ト-13」方向に微傾斜している。

溝の形状は不整形で、底部からは直径 3 ~ 30 cm 大の礫が多量に出土した。礫には人為的な加工痕や配列と思われるものはなかった。このことからこの遺跡は飛行場建設以前にあった、自然の小川とみることができ、礫は整地の為投入したものと推察された。

##### (3) 土 塚(ピット)（第十五回版）

第1区「ニ-10」の表土下 55 cm の茶褐色土層中に黒色土層の入り込んだピットが検出された（第56回）。上部の長径 2.1 m、短径 1.8 m のほぼ長方形で表土からの深さが 1.15 m である。断面の形状は底部が上部より狭く、平面的に掘られており壁面はゆるやかな傾斜を呈している。

表土から -45 cm のピット内に入り込んだ黒色土層中に炭の点在が認められた。このピットの南端「ト-9」から「ト-10」にかけて、不定形のピットが接続している。

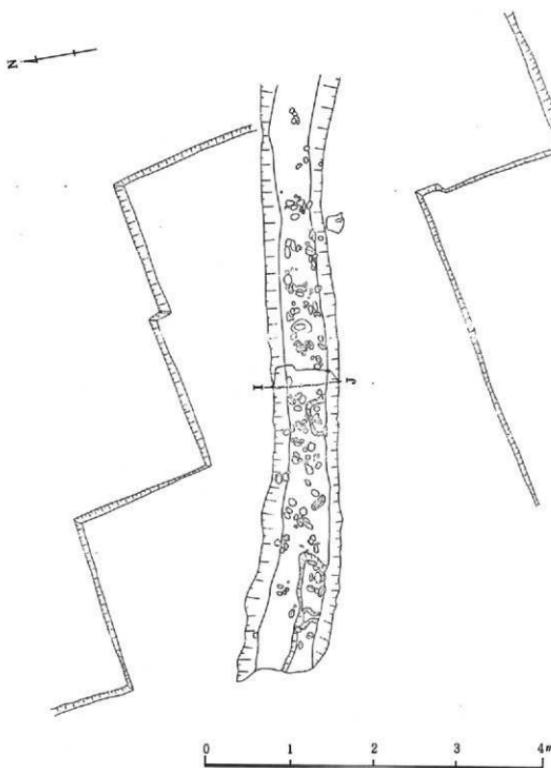
このピットに直接結びつく遺物の出土になかったが「ニ-10」グリッドの表土下 -78 cm から土器片 1、フレーク 1 片が出土している。このピットの西方 25 m の位置にある「ニ-22」とそこから 6 m 西の「ニ-28」区から弥生式土器片が出土している。また、このピットの形状が No.19 遺跡の北西に接している No.26 遺跡の弥生時代の土壤と近似している。この二つのことからこのピットは「No.24 遺跡」と密接な関係を持つ土壤と考えることができよう。

##### (4) 競馬場建物跡

「第2区」の表土約 20 cm に直径 10 ~ 30 cm の礫が 50 ~ 70 cm の円状に敷いてある遺構が 31 基検出された。

各礫群の出土状況は円状にまとまっている。礫群の配列は直角に交わるかその延長上にある。その中心間の距離は約 0.9 m • 1.2 m • 1.8 m • 3.6 m と尺単位の倍数距離になっている。

終戦後、一時競馬場になっていたときこの地点に観覧席があったという地元の人の話から、明らかに競馬場の観覧席跡の根石と栗石であるとみることができる。この地区からの土器の出土は 2 点、石器はフレークが 1 点だけである。



第54図 八幡原Na19遺跡溝状遺構実測図

## 4 出土遺物

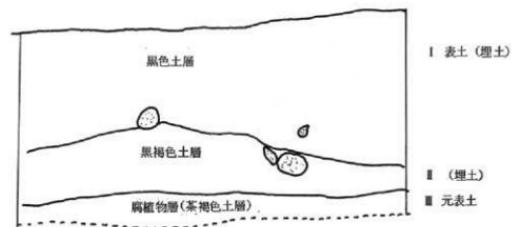
## (1) 石器

全部で26点出土しているが完形の石器は1点もなく、刃部を持つものはスクレーパーの破損したもの1点だけである。その他はコア1点、残りはフレークである。

石器の出土は第Ⅰ区からがほとんどで、第Ⅱ区からはフレークが1点、第Ⅲ区は0である。層的にみると、盛土下より出土したものは「ニ-30」(Ⅲ層-109cm)・「ホ-28」(Ⅲ層 80cm)・「ニ-21」(Ⅲ層 55cm)の3地点で5点だけである。残りは盛土層・表土からでたものである。フレークとコアの形状からみると、縄文時代のものと考えられる。

## (2) 土器

遺物の出土は少なく土器片は全部で16点だけである(第10表)。土器の出土は第Ⅰ層(表土)から多くみられる。遺跡の西側部分は飛行場を建設したときの盛土であり、第Ⅰ



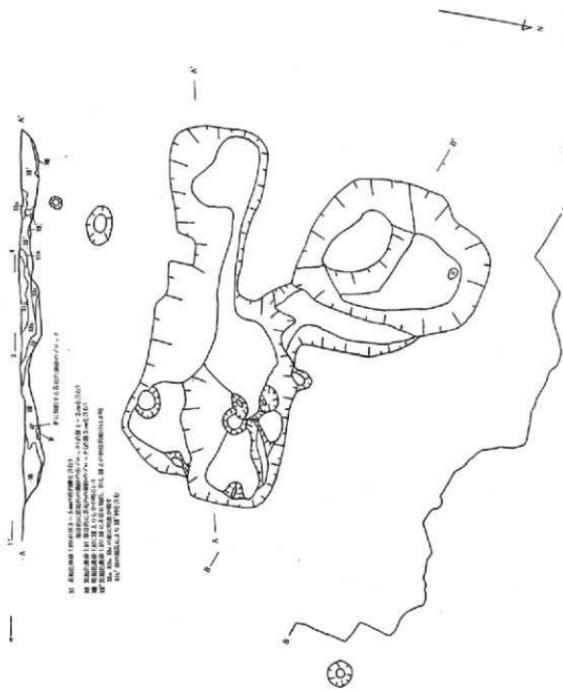
第55図 八幡原Na19遺跡土層柱状図

層出土土器はこの中のものである。また搅乱層中から出土する遺物は、ホップの支柱を埋設するときに混入したものと考えられ、70~80cmの深さから出土している。

盛土層の下である自然堆積層からの出土地点は「ロ-24」(-75cm、縄文前期)・「ニ-22」(弥生)・「ニ-26」(弥生)・「ニ-10」(-78cm・縄文)の5つのグリットだけである。

層的につかめた土器を分類すると、縄文前期が1点、縄文後期1点、縄文(編年不明)1点・弥生3点である。

第Ⅱ区からは、縄文土器1片と土器の焼成とみられる粘土製品が1点出土している。こ



第56図 八幡原№19遺跡土壤実測図

の粘土製品には人間の指紋の圧痕がついている。

第Ⅲ区からは糸切底の施釉土器が1点出土しただけである。

## 5 考 索

今回の調査から№19遺跡の性格を把握することができる資料として

- ア. 発掘調査以前に繩文土器が表探しや耕作中に採取されていた。
- イ. №19遺跡の第Ⅰ区の北西から南東を結ぶ線より南西部は、飛行場建設のときに埋め立てが行われた。その土はこの遺跡の南から運搬されたものが多い。
- ウ. 出土遺物の60%は埋土層からのものである。
- エ. 住居址が検出されなかった。
- オ. 飛行場建設以前に第Ⅰ区南東端から北西端方向に自然の小川があった。

カ. 捣乱されていない自然堆積層の中から、縄文前期・縄文後期・弥生式土器が出土しており、その地点が№24遺跡に近接している。また第1ピットが№24遺跡の土壌に近似している。

これらの資料から、№19遺跡は、住居址群を持つ集落址ではなく、遺跡の北西部が№24遺跡の範囲内に含まれるものである。第Ⅰ区、第Ⅱ区の遺物の出土状況からみて№19遺跡は「遺跡」という名称よりも「遺物の散布地」という方が適切と思われる。

「№19遺跡」から出土した弥生式土器と縄文前期の土器は、№24遺跡のそれと同類のものとみることができる。その出土地点が遺跡の北側になっており、このことと土壌の出土から№19遺跡は№24遺跡の広まりの中に入ると考えることもできる。 (平吹 利数)

第10表 八幡原№19遺跡出土土器一覧

出 土 器	數	編 年	層 序
ロ - 24	1	縄文 前期	III C
ロ - 30	1	縄文	不明
ニ - 10	2	縄文	不明
ニ - 22	3	縄文 ( 2 )	盛土層
ニ - 25	2	弥生 ( 1 )	II ( 元表土 )
ホ - 28	1	縄文	II
ヘ - 20	2	縄文 後期 ( 1 )	III ( 元表土 )
ヘ - 20	1	縄文 ( 不明 1 )	撓乱層
チ - 11	1	縄文	II
ヨ - 4	1	縄文	不明
ゾ - 6	1	縄文	不明
ム - 5	1	縄文	撓乱層

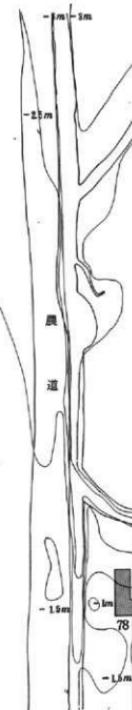
## 第2節 No.18 (清水北B), No.23 (八幡原C) 遺跡

これらの遺跡は、いずれもNo.24 (清水北C) 遺跡の西に接している。うちNo.18遺跡がより南に、No.23遺跡がより北に位置する。前者は、縄文時代前期の集落跡を主とし、一部No.24遺跡と重複していると予想され、後者は、時期不明確ながら縄文時代の集落跡かと推定されていた。No.18遺跡の北辺ぎりぎりおよびNo.23遺跡の南半を東西に走る幅30cmの道路が通り抜ける計画になっているため、No.24遺跡のグリッドを西方へ延長する形で遺跡の範囲調査を実施した。結果は、道路予定線にはNo.18遺跡はふくまれず、No.23遺跡の南北がわずかにふくまれることが判明した。

調査地の平面図(第57図)および層序断面図(第58・59図)をしめしておいた。

なお、両遺跡の中心部については次年度以降において本格的な発掘調査を実施する予定になっている。

(加藤 稔)

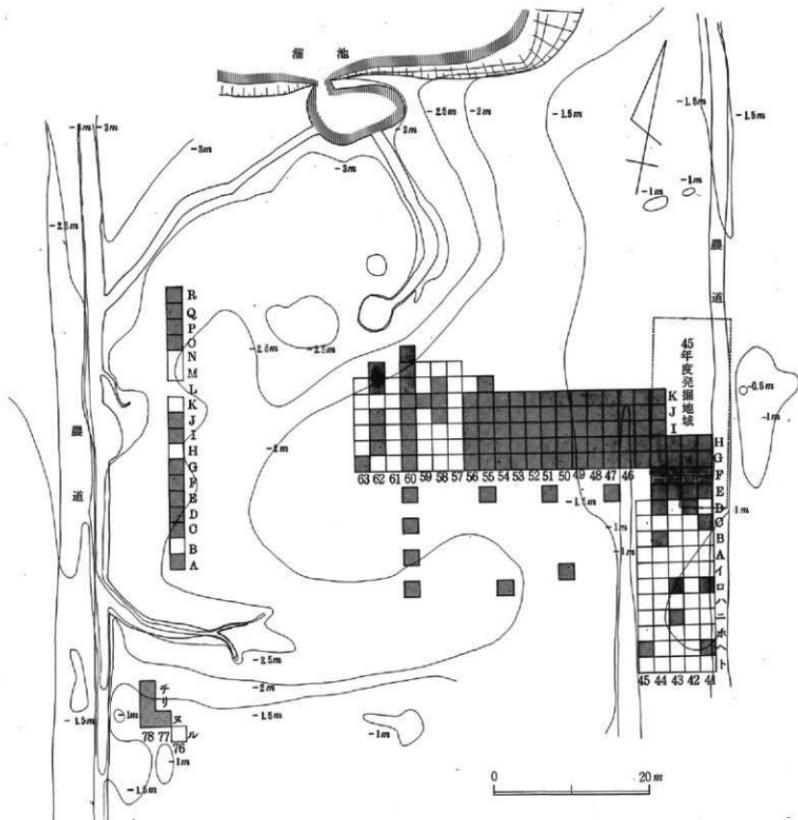


第57図 八

清水北B), No.23 (八幡原C) 遺跡

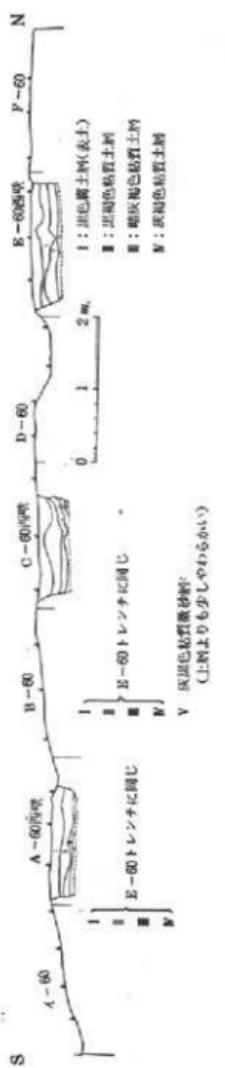
Na24(清水北C)遺跡の西に接している。うちNo18遺跡がより位置する。前者は、縄文時代前期の集落跡を主とし、一部Naされ。後者は、時期不明確ながら縄文時代の集落跡かと推定ぎりぎりおよびNo23遺跡の南半を東西に走る幅30cmの道路がため。No24遺跡のグリッドを西方へ延長する形で遺跡の範囲路字定位線にはNo18遺跡はふくまれず、No23遺跡の南辺がわずかだ。

および層序断面図(第58・59図)をしめしておいた。  
いては次年度以降において本格的な発掘調査を実施する予定  
(加藤 稔)

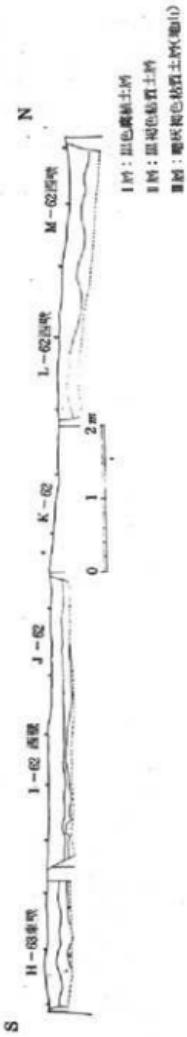


第57圖 八幡原Na18・23・24遺跡地区割図

口～P60トレンチ西壁セクション

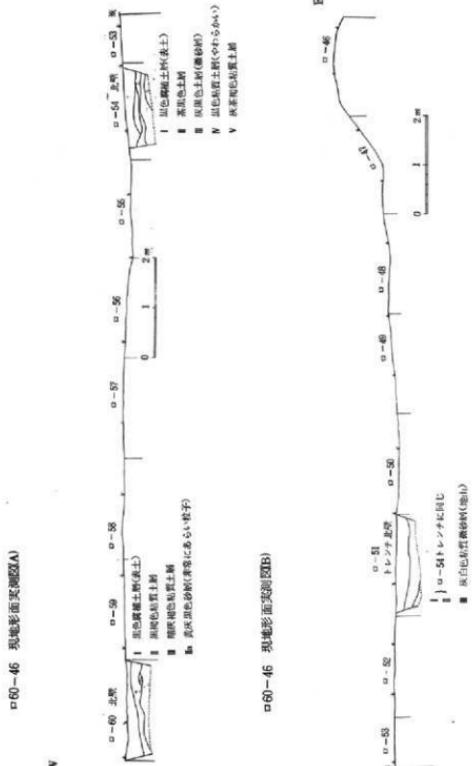


H-63東壁、I-62～M-62西壁セクション



第58図 八幡原No.18・23遺跡南北方向層序断面図

## 八幡原遺跡群



第59図 八幡原No.18遺跡東西方向順序断面図

## 第3節 No.24（清水北C）遺跡

### 1 遺跡の環境と調査に至るまでの経過

No.24遺跡は、山形県米沢市大学牛森字八幡原 5277-14 ほかに所在する。米沢市堂森部落の北東約 370 m に位置し、旧八幡原飛行場の跡地にあたる。地目は現在畑・松や雜木などの森林、カヤ地となっている。天王川が作る扇状地の先端に位置し標高は約 277 m、遺跡の北東部から南西部にかけてゆるやかな傾斜をもつ。

No.24遺跡の周辺には、No.17・18・19・23・25・26遺跡等縄文時代早期から弥生時代後期までの遺跡が密集して分布し、八幡原周辺地区の中でも最大の遺跡群を形成する。

No.24遺跡付近に古代の土器が散在することは 1967(昭和42)年頃より知られていたが、より具体的に知られるようになったのは、1970(昭和45)年 6 月の手塚孝氏による試掘および同年 10 月の堂森遺跡調査団による発掘調査からである(手塚・秦・安彦 1972、横尾 1973)。

1971(昭和46)年頃より No.24 遺跡を含む八幡原地区一帯と牛森山東部地区が、米沢市第4次建設振興計画において米沢東部工業団地に計画され、1973(昭和48)年になって「米沢八幡原中核工業団地」として造成工事が行われることが明らかになった。今回の発掘調査は、それに先だって工業団地造成予定地内の埋蔵文化財包蔵地を調査し、文化財の保護に役立てようとするものである。なおこれらの経緯は、本報告書第1部第2章「調査までの経過」に詳しく述べられている。

今年度の調査は、工業団地造成予定地内でも基幹道路部の発掘を主にしたため、No.24 遺跡の調査区域もほぼ基幹道路予定地内に限られる。

調査は 1974(昭和49)年 9 月 2 日から同年 10 月 10 日までの延べ 39 日間にわたる。

### 2 発掘経過

遺跡の調査はグリッド発掘方式を用い、No.19 遺跡と同一の基準で行った。南北 50 m、東西 46 m の発掘区を設定し、発掘区割内は  $2 \times 2$  m の各グリッド毎に分割した(第 57 図)。No.24 遺跡と No.19 遺跡の境は便宜的に農道によって行い、農道より西を No.24 遺跡とした。具体的には東西方向 40 区から 63 区までが No.24 遺跡の範囲となる。グリッド名はたとえば H46 区のように表現する。昭和45年度に発掘した調査区とは設定基準を異にしたため、今回の発掘区の南北基準方向は、前者より幾分北西方向にずれる。

調査は初めて昭和45年度発掘調査との関連もあり、おおむね農道から順に西方向へ発掘を

実施した。まずE～H41～43区を掘り下げ、昭和45年度の旧トレンチ跡を確認した。つぎにG～K49～56区までを全面掘り下げた。この発掘区からは後述するように縄文時代前期から平安時代までの各時期にわたる遺物・遺構が発見された。特に弥生時代の土層が数多く発見されたことは、予想していたことほいえ大きな収穫であった。

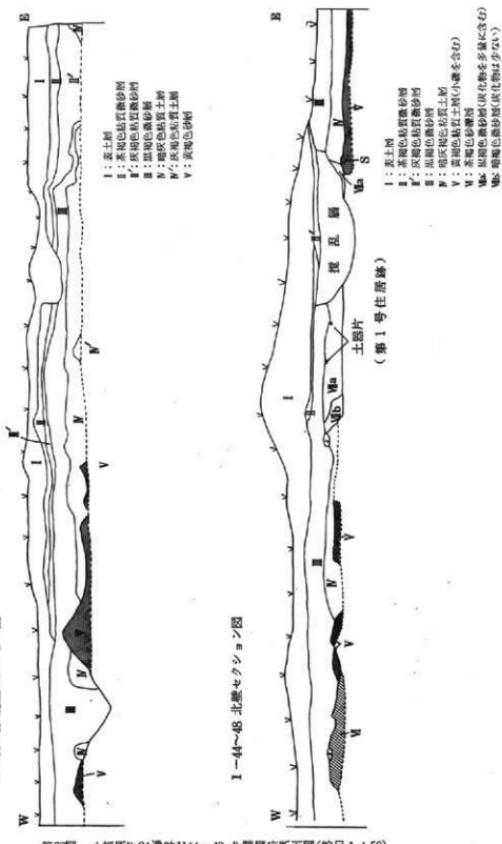
さらに№24遺跡の範囲を把握するために、G～H58～63区までを16グリッドほど発掘したが、この地域からは縄文時代の石片か数点出土したほかは、遺構等は発見されなかつた。これより№24遺跡は西側限界は56区付近にあると推定される。つぎに調査を遺跡の南側に及ぼしへF41～60区の地域を発掘した。この地域は大い雑木が密集して生えており、またできるだけ林を保存するように努めたので、木々の間を16グリッド発掘して留まる。調査の結果、各グリッドとも遺物や遺構が検出されず、また地下水位の高いじめじめした有機物を含む層があることがわかった。当地域は遺跡外と判断される。したがって№24遺跡の南側限界はEないしFライン附近にあると推定される。

最後にこれまでの調査状況を検討し、E～H41～43区とG～K49～56区の中間地域E～K44～48区を発掘した。調査の結果当地域からは、後述するように縄文時代晩期の窪穴住居跡が発見された。とくに縄文時代の晩期の窪穴住居跡が発見されたことは注目される。№24遺跡の北側は道路予定線の区域外にあたるため、調査を行わなかった。今後早急に調査が必要である。

発掘面積は116グリッド、約500m<sup>2</sup>にわたる。

### 3 層位

遺跡における地層は、本遺跡が北東から南西にかけて約1.5mの標高差をもつたため、調査区の北側と南側とでは基準層位は同じでも、各地層の厚さに大きな差異を示す。まず北側は遺構が密集して検出された地域で、その地層はI－表土、II－茶褐色～灰褐色粘質微砂層、III－黒褐色微砂層、IV－暗灰色粘質土層、V－黄褐色砂質土層、VI－茶褐色砂礫層の6つに大別される。このうちII・III層が遺物包含層で、IV～VI層が無遺物層である。これらの地層はさらに10層程に細分できる(第60図)。遺構はVIないしV層を振り込んで作られているが、IV層はVよりも標高が低いところに分布する傾向をもつ。したがって、当時の生活面はVIないしV層の直上にあったものと推察できる。地表面からVIないしV層までの深さは30～60cm、発掘時における掘り下げ面までの深さは40～80cmである。つぎに遺跡の南側の地層は、基本的に北側とは同様であるが、IV－暗灰色粘質土層が40cm以上の厚さをもって堆積するため、掘り下げ面までの深さではV－黄褐色砂質土層とVI－茶褐



第60図 八幡原№24遺跡H44～48 北壁断面図(縮尺1:50)

色砂礫層は検出できなかった。地表面から掘り下げ面までの深さは80~100cmほどである。また前節の発掘経過の項でも触れたが、北側のグリッドではⅢ-黒褐色微砂層の堆積が極めて薄いか、ほとんどないため、遺物や遺構の発見はされなかった。

#### 4 遺構

今回の調査では、G~K-44~56区の東西26m×南北10mの発掘区内で、多数の土壤ないしピット（小穴）が発見された。土壤とピットの区分をどのように行うかはむずかしいところであるが、遺物をほとんど出土しない例が多いため、便宜的に平面形の長径が70cm以上で、かつ埋土が有機物を含む黒褐色微砂層を有するものを土壤とし、それ以外のものをピットとする。ピットの中には、埋土が黒褐色微砂層と黄褐色砂質土層が粗く混じる比較的新しい時期のものと思われる掘り込み遺構をも含めた。またこれ以外に堅穴住居跡や集石遺構は別に分けてある（第61図）。

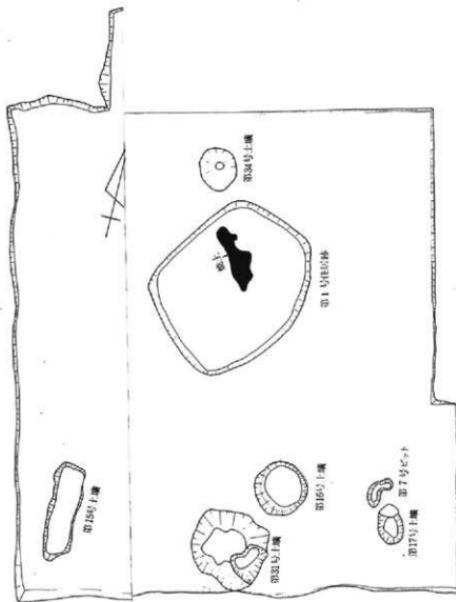
この分類によれば、№24遺跡において今回検出された遺構は、土壤19基、ピット23個、堅穴住居跡1基、集石遺構1基の総計42になる。以下順に主な遺構について説明をしてゆく。

##### 〔第11号土壤〕（第62図、第十八、十九図版）

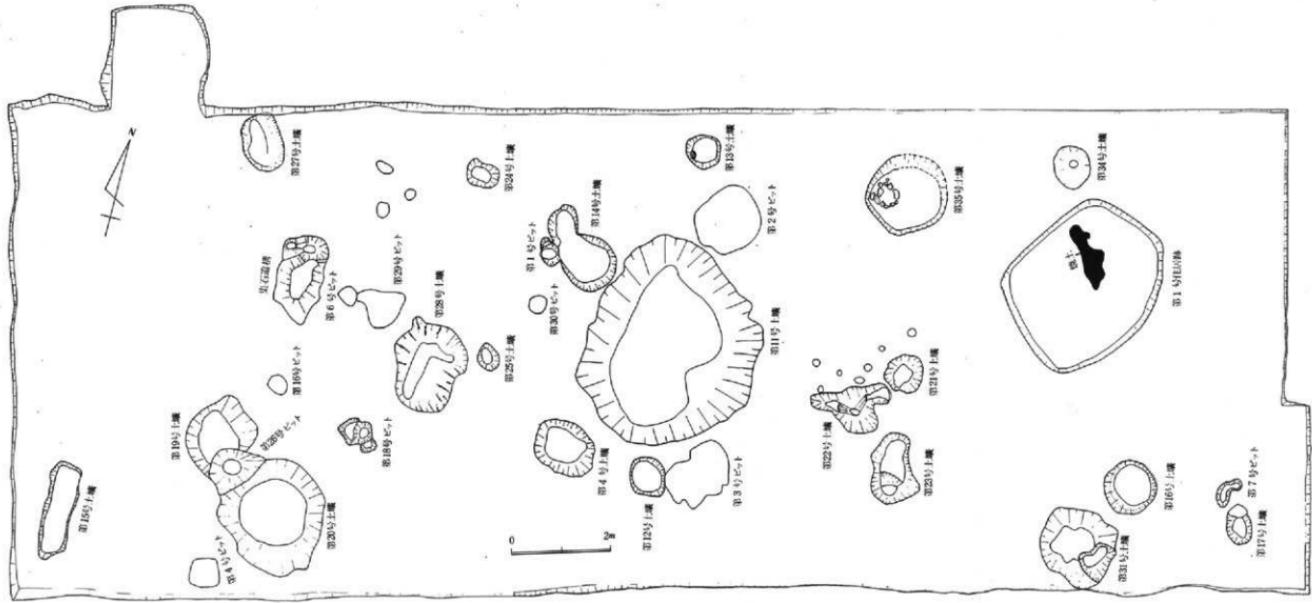
I50区を中心広がり、今回の調査で検出された土壤ではもっとも大規模なものである。東西の長さ417cm、南北の長さ357cm、深さ75cmを測り、形状は不整の梢円形を呈する。遺構はV-黄褐色砂質土層およびVI-茶褐色砂礫層を掘り込んで作られている。土壤内の埋土は、1. 黒褐色微砂層、2. 黄褐色砂礫層、3. 明褐色砂質土層に大別され、3層から一部黒褐色微砂を含む3、褐色砂質土層を分離することもできる。4. 黑褐色腐植土層は木の根の作用によるものであろう。1層が遺物を多量に含む層で、他の地層は無遺物層である。土壤の西半部に1層が長方形状に分布し底面に続く。

本土壤の特徴は第6図の東西地層断面図にも見られる如く埋土の堆積状態にある。まず遺物を多く含む1層を掘り方に添て埋めた後、3層、2層は土壤を掘る際に生じた全体地層のV層とVI層に比定でき、しかもより深部に堆積するVI層が埋土2層として上部に位置する。これらの地層の堆積状況は、1970(昭和45)年の発掘調査の際に第1号土壤にも類若に認められた。

遺物は埋土1層より出土し、すべて弥生式土器である。器形は、壺形土器・壺形土器・鉢形土器・蓋形土器の4種類があり、№24遺跡で出土した弥生式土器の大半を占める。土器はすべて小片であり、発掘過程においても一括土器は認められない。



第61図



第61図 八棟原N-24道路遺構配置図

## 〔第12号土壤〕(第62図)

第11号土壤のすぐ南側に発見され、東西71cm、南北76cm、深さ約20cmを測り、ほぼ円形を呈する。埋土は二層に分かれ、上層が黒褐色微砂層、下層が炭化物を含む褐色砂質土層である。土壤内には円礫が1個発見されただけで、土器等の出土はみられなかった。

## 〔第13号土壤〕(第62図)

第11号土壤の北側近くに発見され、東西70cm、南北70cm、深さ14cmを測り、ほぼ円形を呈する。埋土は二層に分かれ、上層が黒褐色微砂層、下層が炭化物を含む褐色砂質土層である。土壤内には長径17cmのピットが1個検出されただけで、土器等の出土はみられなかった。

## 〔第14号土壤〕(第63図、第二十一図版)

第11号土壤のすぐ北側に発見され、東西181cm、南北104cm、深さ33cmを測り、くびれ部を有する。発掘過程では1号ピットのはかは切り合い関係が認められなかったが、形状からみてあるいは二つの土壤が重複しているわかも知れない。埋土は三つに分かれ、上層に明褐色砂質土層と褐色砂質土層が、下層に黒褐色微砂層が堆積している。遺物は黒褐色微砂層より2片縄文土器が出土した(第9図7・9)。土器の表面には太目の斜縄文と縦文原体の結束部を押したわらび状痕痕が施されている。

## 〔第15号土壤〕(第63図、第二十二図版)

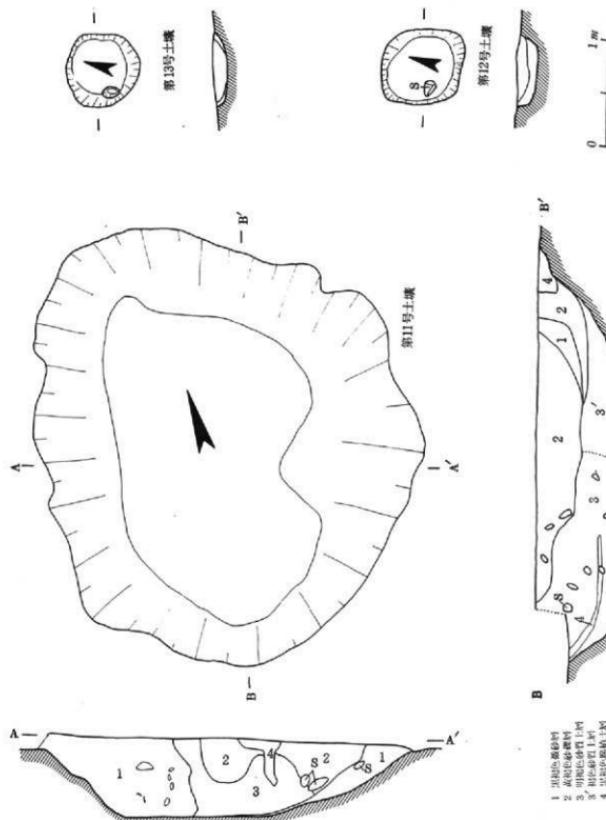
G・H56区で発見された東西62cm、南北198cm、深さ15cmの南北に長い長楕円形を呈する土壤である。底面はほぼ平坦で、埋土は炭化物を含む黒褐色微砂層の單一地層である。この層より弥生時代の甌形土器2片、鉢形土器1片(第10図48)が出土している。

## 〔第16号土壤〕(第63図)

G 45区より発見された東西108cm、南北105cm、深さ53cmの円形の土壤である。横断面が遺構検出面下約15cmのところでいったんすばまり、さらにもう一度開く所謂袋状の土壤である。土壤内の埋土は6層に分かれ、各層は土壤の縁辺から中央にかけて交互に堆積し、一種の自然堆積の状況をうかがわせる。底面にはやや大きな扁平の礫と細礫が散きつめられたように分布する。土壤内6層より縄文式土器が1片出土した。深鉢の口辺部で上半が荒磨きされ、体部に縦線の粗い縄文が施されている(第9図12)。本土壤は、形態・伴出遺物とも弥生時代の土壤とは区別されるものである。

## 〔第17号土壤〕

G 44区で発見された東西73cm、南北40cm、深さ15cmの楕円形の土壤である。北側が後世のピットによって切られている。埋土は二層に分かれ、上層が褐色砂質土層、下層が黒褐



第62図 八幡原№24遺跡土壙実測図(1)

色微砂層である。土壙内からは土器等の遺物の出土はみられなかった。

**[第19号土壙]** (第8図、第二十図版)

H 54・55区で発見された東西約122cm、南北144cm、深さ47cmのほぼ円形の土壙である。東側が第26号ピットによって切られている。埋土は三層に分かれ、上層が黒褐色腐植土層、中層が褐色砂質土層、下層が黒褐色微砂層である。土壙内からは、弥生式土器片が1片出土している。

**[第20号土壙]** (第8図)

19号土壙のすぐ東側に発見された東西216cm、南北235cm、深さ42cmのほぼ円形の土である。西側が第26号ピットによって切られている。遺跡の底部に位置するため、埋土は他の土壙と若干異なるが、比較的縦位の堆積がみられるのが特徴である。土壙内からは土器等の遺物の出土はみられなかった。

**[第21号土壙]** (第7図)

I 47区・第1号住居跡のすぐ南側に発見された東西77cm、南北76cm、深さ15cmのほぼ円形の土壙である。埋土は二層に分かれ、上層が黒褐色微砂層、下層が褐色砂質土層である。遺物は上層から、竹管による刺文文を有する繩文式土器が1片出土した(第9図16)。

**[第22号土壙]**

21号土壙のすぐ南西に発見された東西160cm、南北94cm、深さ29cmの不整な楕円形を呈する土壙である。埋土は二層に分かれ、上層が黒褐色微砂層、下層が褐色砂質土層である。土器等の遺物の出土はみられなかった。

**[第23号土壙]**

22号土壙の南東に発見された東西100cm、南北130cm、深さ26cmの楕円形の土壙である。埋土は二層に分かれ、上層が黒褐色微砂層、下層が褐色砂質土層である。土壙内からは土器等の遺物の出土はみられなかった。

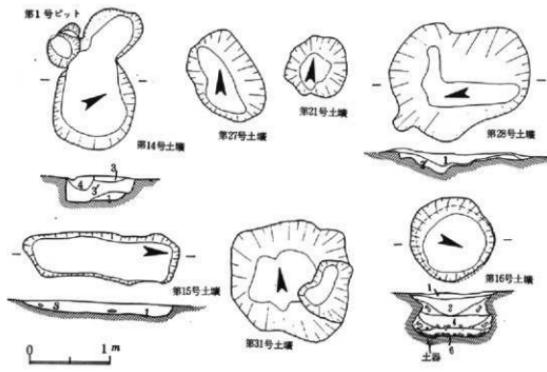
**[第24号土壙]** (第二十一図版)

K 52区で発見された東西77cm、南北49cm、深さ10cmの楕円形の土壙である。埋土は二層に分かれ、上層が黒褐色微砂層、下層が礫の混った褐色砂質土層である。土壙内からは土器等の遺物の出土はみられなかった。

**[第25号土壙]**

28号土壙のすぐ北側で発見された東西45cm、南北56cm、深さ22cmの楕円形の土壙である。さきの分類による大きさから言えばピットになるが、埋土が炭化物を含む黒褐色微砂の單一層なので、土壙内に含めた。土器等の遺物の出土はみられなかった。

## I 八幡原遺跡群



第63図 八幡原No.24遺跡土壙実測図(2)

### [第28号土壙] (第7図)

K 54区で発見された東西83cm、南北117cm、深さ24cmの楕円形の土壙である。埋土は不明で、土器等の遺物の出土はみられなかった。

### [第28号土壙]

I 52区で発見された東西145cm、南北175cm、深さ25cmの不整な楕円形の土壙である。埋土は二層に分かれ、上層が黒褐色微砂層、下層が褐色砂質土層である。両層とも小円錐を多く含む。土壙内からは、土器等の遺物の出土はみられなかった。

### [第31号土壙] (第7図)

第16号土壙のすぐ南に発見された東西154cm、南北158cm、深さ32cmのほぼ円形の土壙である。西側が後世のピットによって切られている。埋土は不明で、土器等の遺物の出土はみられなかった。

### [第34号土壙]

第1号住居跡の北側近くに発見された東西73cm、南北96cmの楕円形の土壙である。埋土は不明であるが上層より構文式土器が2片出土している。

### [第35号土壙] (第8図、第二十三回版)

K 47・48区、第1号住居跡の西北に発見された東西165cm、南北165cmの浅い掘り込み

## 3 No.24遺跡

をもつ円形の土壙である。土壙内には長径10cm前後の円錐を数個組み合わせた方形の石組遺構が1基検出された。石組部の大きさは東西53cm、南北46cmを測り、方向はほぼ北を向く。石組部内にも掘り込みをもち、この中から炭化物と焼土が検出された。炉の可能性が強い。土壙内からは、石組部の外側土壙の南端で縄文時代晚期の粗製深鉢が1点出土している。

### [第1号住居跡] (第二十三、二十四回版)

I・J 45・46区、第35号土壙の南東部に発見された長径約330cm、短径約273cm、深さ約20cmを測る隅丸方形の堅穴式住居跡である。長軸の方向は磁北よりやや東に傾向。住居跡はⅣ-暗灰褐色粘質土層およびⅤ-黄褐色砂質土層を掘り込んで作られ、壁の立ち上がりが明瞭である(第5図)。住居跡内の埋土は二層に分けられ、上層が炭化物を多量に含む黒褐色微砂層、下層がやや炭化物を含む暗褐色微砂層である。住居跡の北側には焼土が細長く分布し、長径137cm、短径45cmを測る。炉などに相当する掘り込みは検出できなかった。

埋土の下層、床面直上から三個の完形土器が出土し(第9図28・29)、住居跡の時期を決定する好資料となった。28は渦巻形土器で、口縁部から体部上半にかけて羊齒状文が丹念に施されている。29は口縁部が欠損している小形の壺形土器で、体部全面に単節斜継文施されている。これらの土器は、縄文時代晚期大洞B式に比定できるものと、住居跡の作られた時期もこれと同様に考えられる。

第1号住居跡は、東側が後世の掘り込みによって大きく破壊されていることと、その検出時期が調査の終了時にあつたため、柱穴や深さに一部不明な点がある。次年度に精査したい。

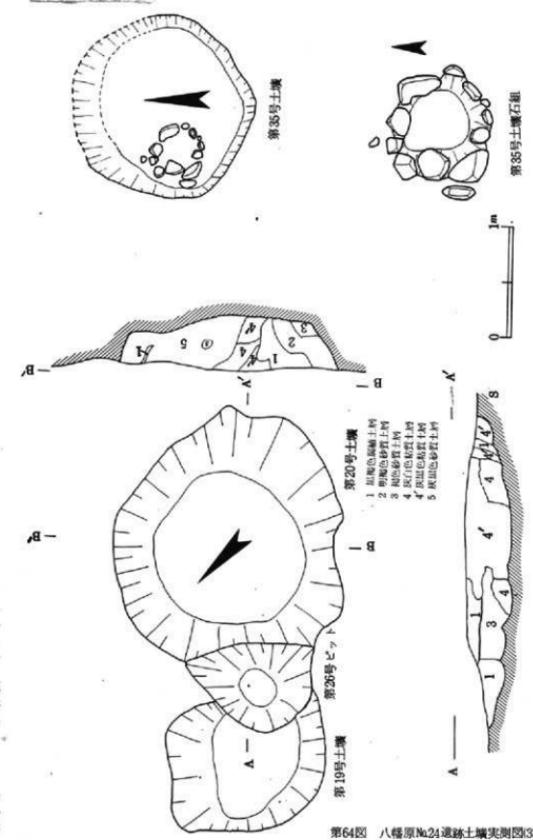
### [第1号集石遺構] (第二十五、二十六回版)

J 53区で発見された東西96cm、南北188cm、高さ約10cmを測る5cm前後の円錐を多量に盛った集石遺構である。集石の最下部より土器壊が1点発見された(第11図17)。掘り込みや炭化物等は検出できなかつたが、古代の火葬墓的な性格が考えられる。

土器壊は、底面に糸切り痕をもつ体部外面にロクロ整形の痕が明瞭にうかがえるもので、内面には丹念な荒磨きの後黒褐色化処理が施されている。これらの特徴から、土器壊の時期は、表杉ノ入式(平安時代後期)に比定でき、集石遺構の作られた時期もほぼ同じように考えられる。

### [ピット]

今回の発掘調査における土壙や堅穴式住居跡を除くピットとした掘り込みは計23個を数



第64図 八幡原№24遺跡土壌実測図(3)

える。これらは、埋土の状態からみて後世の新しい掘り込みと推定できるものもある。その他にたとえばI 48区のピット群のように柱穴と考えられるものもある。これらのピットは、地表面から比較的浅いところに位置することと、ピット内からの遺物の出土がほとんどないことから、性格や時期を決めることが困難であった。今後の課題としたい。

## 5 遺 物

今回の調査で発見された遺物は、土器・石器等合わせて整理箱約6箱である。これらの遺物は、時代的に縄文時代・弥生時代・平安時代の三つに大別される。縄文時代の遺物は主に第1号住居跡および第1号集石遺構附近から出土し、平安時代の遺物は主に第1号集石遺構から出土した。弥生時代の遺物は、各土壤より出土するが、特に第11号土壤のものが大半を占める。

### (1) 石器 (第二十七回版)

№24遺跡における石器の量は、剥片も含めて整理箱約1箱である。剥片ないし剥片の一部に二次加工があるだけの不定形石器が多く石鏃・石窓等の定形化した石器は少ない。

#### i) 振器 I 種 (第12図1~3)

長径9~11cmの厚壁の縦長剥片に整形加工を施したものである。加工は両面におよぶが特に先端部が著しい。側縁が機能部分と思われるが、先端部の欠損しているものがあることも合わせると、打製石斧の可能性をもつ。

#### ii) 振器 II 種 (同4~11)

剥片の一部に刃部を作り出すための明瞭な整形加工をもつが、とくに一定の形態はもたない石器群である。6は両面加工の刃部をもつ。7・8は尖頭部の作り出しがみられる。

#### iii) 石 鑷 (第13図)

基部が欠損しているが、尖端を丁寧に加工して針部を作り出したものである。

#### iv) 加工痕のある石片 (第13図13~15)

フレイクの先端ないし側縁に明瞭な加工痕を有しているものである。

#### v) 使用痕のある石片 (同16~21)

加工痕はないが使用痕と思われる連続した刃こぼれが認められるものである。

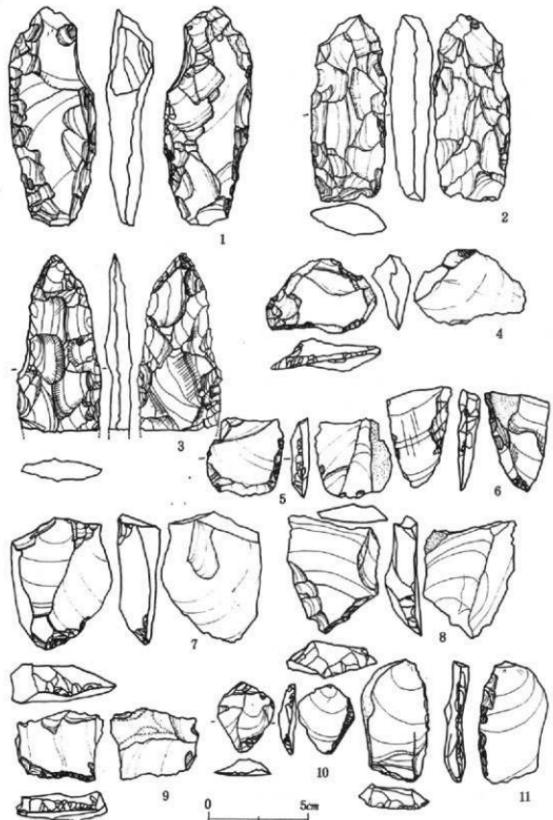
#### vi) 破 器 (第13図22, 第13図23)

縦の先端ないし右側縁に使用痕または擦痕が認められるものである。

#### vii) 石 核 (第14図24~28)

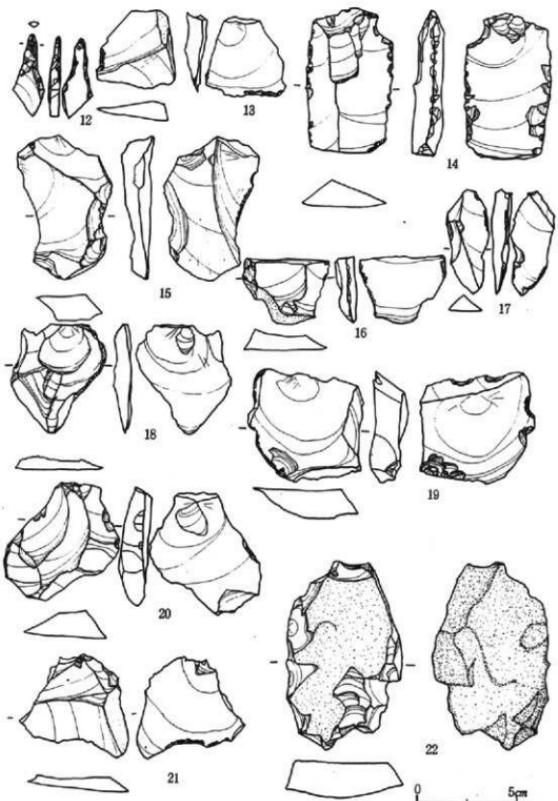
24~26は、打面から数回の連続剥離して石片をとった所謂円整形石核である。

八幡原遺跡群

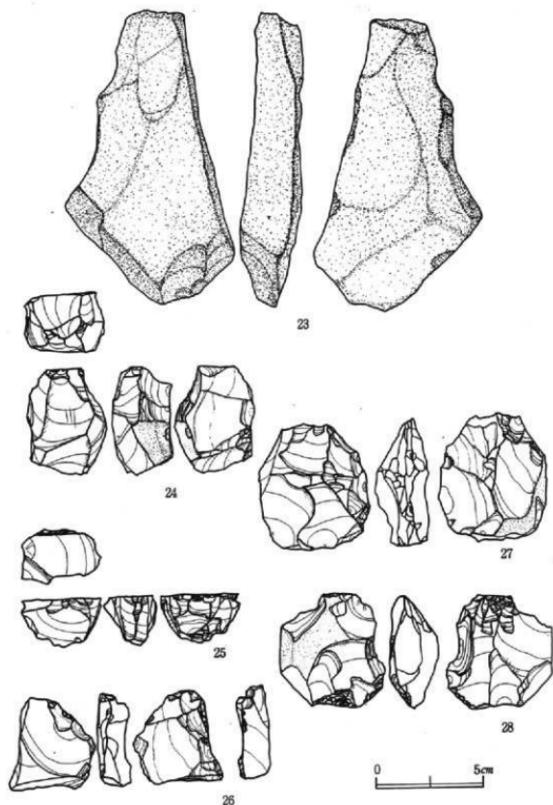


第65図 八幡原No.24遺跡出土石器実測図(1)

No.24遺跡



第66図 八幡原No.24遺跡出土石器実測図(2)



第67図 八幡原No24遺跡出土石器実測図(3)

## (2). 土器

## I) 繩文土器 (第9図, 第二十八, 二十九図版)

繩文式土器は、施文方法および器形から5類に大別できる。

## A 類土器 (第68図1・3~6・11)

短い繩文原体による斜繩文と、先端の尖った工具による平行波状文を特徴とするもので、口縁部裏面および口唇部に施文されているものもある。口縁部破片が多く器形は不明であるが、口唇部が平坦な深鉢形を示すと思われる。本類土器の時期は、繩文時代早期後葉に位置するものであろう。「大寺式」の仲間とみられる。

## B 類土器 (第68図2・7~10)

土器表面に絡状压痕文とよばれる特殊な繩文を施し、これと円形竹管文および半截竹管による横位の連続波状のコンバス文を組み合わせたものである。胎土に多量の繊維を含む。

本類土器は、関東地方で「花模下層式」とよばれている土器群に併行し、西置賜地方では「野山式」とよばれているもので繩文時代前期初頭に位置する。

## C 類土器 (第68図12~15)

器壁が厚く、粗い単節繩文を施しているものである。胎土に繊維は含まない。詳しい時期は不明であるが、昭和45年採集資料に1点繩文時代中期に相当するものがあり(第図1)，これと近い時期のものであろうか。

## D 類土器 (第68図16・21・28)

先端の鋭い工具による刺突文、平行沈線文を特徴とするもので、28はそれらを組み合せた羊歯状文が施されている。器形は浅鉢ないし小形の鉢が主である。

本群土器は、繩文時代晚期前半「大洞B C式」に併行するものである。

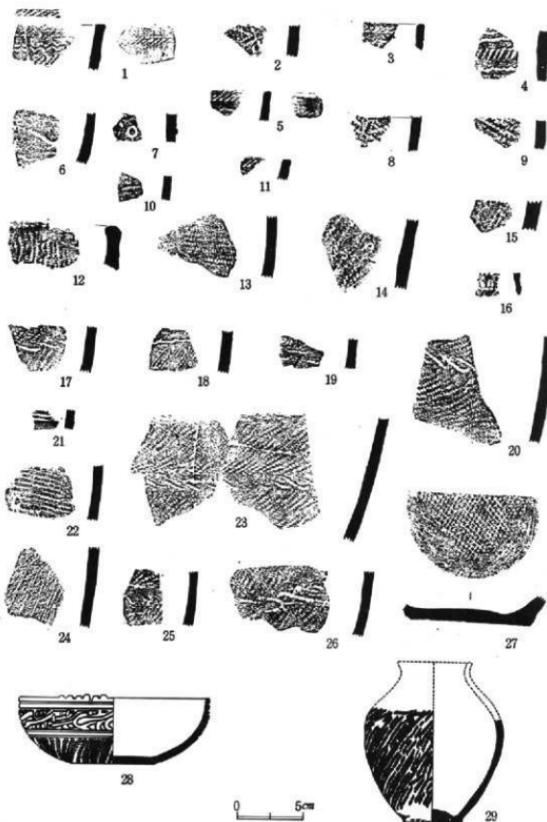
## E 類土器 (第68図17~20, 22~27, 29)

単節の斜繩文を特徴とするもので、しばしば繩文原体の結節部の回転による文様を伴なう。器形は深鉢が主であるが、29は小形の壺形土器である。27は深鉢の底部に認められるアンペラ状の圧痕である。

本群土器の時期は、一部不明なものもあるが29の器形およびD類土器と併出することから繩文時代晚期前半に属するものであろう。

## II) 弥生式土器 (第69~70図, 第三十一~三十五図版)

今回の調査で出土した土器の主体を占めるもので、器形によってA. 壺形土器, B. 壺形土器, C. 鉢形土器, D. 壺形土器の4つに大別される。



第68図 八幡原№24遺跡出土土器拓影・実測図(1)

**A. 麗形土器 (第69図1~14)**

完形品もしくはそれに近いものがないため、明らかに麗形土器と認定できるのは、口縁部附近の破片だけである。麗形土器はさらにつぎの4類に細別できる。

**a 麗土器 (第69図1~4, 6~8, 11)**

口頸部が強く屈曲して「く」字状をなすもので、口唇部に横位回転による斜縞文、口頸部に横方向に走る「ナデ」の痕跡が認められる。頸部と体部の境に繩文原体の結節回転による続縞文が施され、体部には全面に単節斜縞文が施されている。内面は横方向にヘラ磨きされたものが多い。

**b 麗土器 (第69図5)**

口頸部と体部の境が不明瞭で、直立に近い形をとるものである。口唇部に横位回転の斜縞文が施され、以下頸部から体部にかけて全面に粗い単節斜縞文が施されている。

**c 麗土器 (第69図10・12~14)**

口頸部が比較的強く反応し、短いもので、頸部のくびれはa類土器ほど強くなく厚手のものが多い。口頸部は横方向にナデして整形してあり、口唇部には縞文があるものとそうでないものの二つがある。肩部に数条の平行沈線ないし山形の沈線文が施されている。

**d 麗土器 (第69図9)**

口頸部がほぼ直立し、頸部と体部の境に屈曲を有するものである。口縁部は平坦で、口頸部から体部にかけてヘラ状の工具による山形の平行沈線文が施されている。体部上半の平行山形文はその頂点と最下部に縦位の刻み目をもつ。

1970年の発掘調査では麗形土器はa類しか検出できなかったが、今回の調査で新たにb~dの3類が加わることになる。

**B. 麗形土器 (第69図15~42)**

弥生式土器の中で最も多く量を占めるもので、加飾が他の壺・鉢などに比べて著しい。ただし今回の調査で出土した資料は小破片が多いので、1970年度調査の資料もできるだけ活用してゆく。

さきに横尾秋子氏は、№24遺跡出土の麗形土器によってつぎの3種に分類した(横尾1973)。

- (a) 頸部が長いいわゆる長頸壺
- (b) 頸部の短い短頸壺
- (c) (a), (b)の中間の形態をとるもの

筆者も基本的には横尾氏と同じ考え方であるが、今回の発掘資料および1970年度調査資料



第69図 八幡原№24遺跡出土土器拓影・実測図(2)

を吟味した結果、(c)種はさらに3つに細分できるようである。したがってここでは盃形土器をつきの5類に分類する。

#### a 頸土器 (第69図40)

頸部が長いいわゆる長頸壺で、1970年度調査の際4個体分出土しているが、今回の調査ではっきりした出土例が少なかった。盃形のふくらみを持つ内わんする口縁を有し、体部に比して頸部が著しく長いものである。文様はヘラ状工具による3~4条の平行沈線文および方形文を主とするが、平行沈線文を縦に切断した工字状の文様も一部存在する。比較的小形の土器が多いようである。

#### b 頸土器 (第69図15~26, 41~42)

球状を呈する体部にすぐ口縁の内わんするふくらみをもった頸部がつくものである。文様は口縁部に平行沈線文、体部上半に重三角文、体部下半に縄文ないし撚糸文が施される。

#### c 頸土器

盃状の口縁部とほぼ直立する頸部をもち、丸味をもった体部が中程で強く屈曲するものである。本類は1970年度調査で1個体出土しただけであり、今回の調査では認められなかった。文様は口縁部に附加纏糸文、頸部はナデ調整、体部上半にヘラ状工具による平行沈線文および細い磨消纏糸による山形文が施される。

#### d 頸土器 (第69図27~39)

頸部がa類型長くはないが、丸味をおびた長胴の体部から頸部が自然に立ち上り、ふくらみをもつ内わんする口縁につながるものである。文様は口縁部にナデ調整ないし平行沈線文、頸部にヘラ状工具による方形文ないし連弧文、体部上半に渦巻文および重三角文、体部下半に縄文ないし撚糸文が施される。体部上半の渦巻文は沈線だけのものと磨消纏糸を伴うものの2種があるが、沈線だけの場合もミガキの多寡や朱塗の有無等によって磨消纏糸文に近い効果を成しているものが多い。

#### e 頸土器

器形はd類に似ているが、頸部および口縁部が体部に比して太いものである。1970年度調査で1例出土しているが、今回の調査では発見されなかった。文様は口縁部にナデ調整、頸部にヘラ状工具による菱形文が施されている。体部以下は不明である。

#### C. 筒形土器 (第69図43~48, 第11図1~11)

今回の調査で発見された資料は完形品またはそれに近いものが少ないため、口縁部のみで筒形土器と盃形土器とを区別することは困難である。第10図16のように直立する底部

をもつもの以外は、便宜上すべて鉢形土器として扱う。鉢形土器は器形および施文方法からつきの3類に分類できる。

a 頂土器 (第69図43~48, 第11図1)

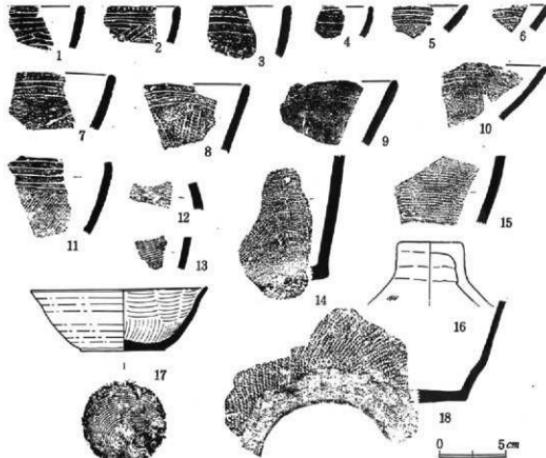
体部がほぼ真っすぐに立上り、口縁部でやや内わんするものである。文様は口縁部から体部全面に、ヘラ状工具による平行沈線文、山形文が施されている。山形文の交差部に縦の刻みが入っているもの (第69図44・48) や磨消彫文を伴うもの (第70図1) もある。

b 頂土器 (第70図3~11)

体部から口縁部にかけてほぼ真っすぐに立上るものである。器壁がa類土器に比べ、一般に厚い。文様は口縁部に3~4条の平行沈線が施され、体部は斜彫文およびナデ調整が施されている。

c 頂土器 (第70図2)

丸味をもつて体部が口縁部でやや直立するもので、口唇部に連続した刺突が施されている。文様は体部上半に平行沈線および重三角文が施されている。



第70図 八幡原№24遺跡出土土器拓影・実測図3

D 蓋形土器 (第70図16)

先述したように蓋形土器と鉢形土器を土器片で区別することは困難である。まして鉢形土器が葬物の際にしばしば蓋形土器に対し蓋としての機能を果たすことを考えればなおさらである。

ただ№24遺跡からは、第10図16のような上げ底風の土器が出土し、実際の用途でも穿孔を有し蓋として使用されているものがあるので一応蓋形土器として分類する。表面はナデ調整がみられ、内面に巻き上げ痕を有する。口縁部が欠損しているが、1970年度調査例からみて口縁部に平行沈線ないし山形文が伴うものと思われる。

II 土師器・須恵器 (第三十六図版)

№24遺跡から土師器と須恵器も出土している。両者合わせて4点と少ないが、本遺跡からは初めての発見である。完形の土師器壺 (第70図17) は1号集石遺構の下部より出土したものであり、他の3片は地形の落ち込み部の包含層上層より出土したものである。

土師器は、外面がロクロ成形され糸切り底を有する壺であるヘラ削り等の調整はない。内面は丹念なヘラ磨きの後、黒色化処理を施している。器形は口縁部が外反し、なだらかな立上りを示す。これらの特徴から本土師器は、「表形ノ入式土器」の範疇に属するものであり、時期は平安時代後期頃に求めることができる。

須恵器は、壺底部片が2点出土している。いずれも糸切りによる切離を持ち、内外面にロクロ成形痕が明瞭に認められる。時期等に関しては小片のため明らかでない。

## 6 まとめ

今回の発掘調査によって、19基の土壙など多数の遺構、およびひとつのまとまりを有する弥生式土器などが発見された。№24遺跡はまだ全面調査が終ったわけではないが、1970年度の調査結果と合わせると、多くの成果を得たことになる。ここではそのうち、弥生時代の土壙の性格と、弥生式土器の編年的位置について若干のまとめを試みたい。

### (土壙群の性格について)

今回の調査で発見された19基の土壙のうちから第16号、33~35号土壙等の編文時代に属すると思われる土壙を引くと、その数は16基になる。これに1970年度調査で発見された10基の土壙を加えると総計26基になる。勿論この中にには伴出遺物を出土しない——したがって厳密には時期が不確定な——土壙もかなりあるが、形態や埋土から一応弥生時代の土壙と考えることが可能である。

1970年度調査報告で触れたように、第1号土壙の下部からは合口の蓋形土器が発見され、

しかも壺形土器の底部には二次的な穿孔が施してあった。これにより№24遺跡の土壙群のうち幾つかはほぼ確実に埋葬施設に関係することが判明したわけであるが、その他の土壙の性格はどう考えればよいのであろうか。

その前にも少し視野を広げ東日本における遺跡の様相をみてみたい。東日本における弥生時代のこの種の土壙群が埋葬に関係のある遺跡ではないかと考えられるようになったのは、1938年の群馬県岩槻山遺跡の調査（杉原・大塚1967）からである。その後類例を増しとくに1963年の千葉県天神前遺跡の調査（杉原・大塚1974）では、從来副葬品とも考えられてきた土器自体が容骨器であり、したがってこの種の土壙が死骨による再葬墓遺跡であることが明らかになった。東北地方南部においても、近年弥生時代中期後半における同様な遺跡として、福島県陣場遺跡（馬目1971）、同福澤沢遺跡（伊東他1971）、同柏山遺跡（伊東・須藤1972）などの発見が相いでいる。

№24遺跡は時期的にもまさにそれらの東北南半の遺跡と同様な性格を持つものであるが、内容的にはさらに一步論を進め得る好資料と考えている。№24遺跡の土壙群は、I-規模が2~4mと大きく深さも深い。また遺物を多量に含むものと、II-規模が1m前後と小さく深さも浅い。また遺物をほとんどしない僅かしか含まないものの二類に分けることができる。第I類に属する土壙は、1970年調査の第1・4号土壙および今回の調査における第11号土壙の3基である。これらの土壙は、埋土の状態から明らかに人為了に埋めたものと解釈され、特に第1号土壙は上下2枚の遺物包含層を確認することができた。

第II類に属する土壙は、第1・4・11号土壙を除く23基で、いずれも第I類の周辺にとり囲むように位置する。ただし第15号土壙だけは、長椭円形を呈することやその位置から今後さらに分離できるかもしれない。

さきにあげた千葉県天神前遺跡の調査報告（杉原・大塚1974）では、9個の土器中に含まれる人骨例をもとに、土壙群の性格をつぎのように推察している。

「かれらは同僚が死亡すると、まず第1次の墓地に土葬し、それが白骨化するのを待って、その遺骨の一部分を、集落で使用していた壺あるいは壺の中に入れて、第2次の墓地に埋葬を掘って、その中に埋葬し、そして復土する。その際、多少の盛土を行なったと思われる。」

さきに筆者らも、第II類の土壙を1次土葬のための土壙、第I類の土壙を2次埋葬のための集骨墓と考え、土壙群の有機的な関連を推定した。今回検出された16基の土壙群も実際の人骨の出土例がないとはい、この考えを強く示唆するものである。1次土葬と2次集骨の場所は意外に近い所に存在していたことになろうか。

#### (弥生式土器の編年的位置について)

最後に№24遺跡出土の弥生式土器の編年の位置についてまとめてみる。弥生式土器はそのほとんどが土壙内、とくに前述した第I類の土壙内より出土したもので、若干の追葬の可能性を考えたとしても、ほぼ同一時期のものと考えられる。

器形は、壺形土器・壺形土器・鉢形土器・蓋形土器の4種類があるが、量的には壺形土器がもっと多く、以下鉢形土器・壺形土器・蓋形土器の順になる。このうち壺形土器について主に器形からa~eの5類に分類した。施文の方法もこれら器形に密接に関連するようである。壺形土器のうちa・c類土器は、南御山Ⅱ式に類似し、b・d類土器はニッ釜式に、e類土器は山草荷式に類似する。またヘラ状工具による單一沈線の施文手法は、福島県の柏山遺跡、福澤沢遺跡、陣場遺跡等の土器に共通性をもつ。またb類土器は広義の南御山Ⅱ式にも認められるものである。本遺跡の弥生式土器全体的には東北南半における弥生式時代中期後半から後期初頭の範疇に位置付けられるものであることはまちがいない。

ただし時期的な伴出関係は考慮する余地はあっても、樹形式土器とは型式を異にすると思われる。米沢盆地では高畠町原遺跡においてはほぼ純粋な樹形式土器が出土しており、ことに壺形土器a類に認められる頸部と体部の境の継縫文と列点文の違いは明瞭である。

白石盆地と米沢盆地の一部以南が東北南半のこの種の土器の分布圏にならうか。近年所謂円田式土器についても類例が増し、再吟味の必要が説かれている（伊東・須藤1972）。また柏山遺跡や福澤沢遺跡の壺形土器等には、渦巻文や連弧文の接点にしばしば小さい粘土粒がはりつけられており、これに対し№24遺跡の土器には粘土粒が認められない。山形県において特徴ある土器群であることは疑いないにしても、その型式把握についてはなお慎重を期したい。

（佐藤 庄一・加藤 稔）

#### 参考文献

- 伊東信雄・須藤 隆（1971）『郡山市福澤沢遺跡発掘調査報告書』
- 伊東信雄・須藤 隆（1972）『郡山市柏山遺跡発掘調査報告書』
- 馬目順一ほか（1971）『岩代神道跡の研究』
- 杉原 莊介（1967）『群馬県岩槻山における弥生時代の墓址』考古学雑誌3-4
- 杉原莊介・大塚初一（1974）『千葉県天神前における弥生時代中期の墓群』
- 手原 孝・秦 昭繁・安藤政信（1972）『米沢市八幡原周辺の遺跡』置賀考古3
- 横尾 秋子（1973）『米沢市常春遺跡出土の弥生式土器』工藤定雄教授還暦記念論文集

## 第3章 牛森辻ノ堂地区の遺跡

### 第1節 №35, 36, 37遺跡の地形と現状

長壇・辻ノ堂A・B遺跡は、梓川が米沢市柿山周辺より開ける扇状地末端にあり、標高約60mに位置する。とくに梓川が牛森地区で、西方に大きく蛇行する右岸の一帯の河岸段丘に立する平坦地域である。この地域は、扇端部に位置するため、上竹井地区を中心に多くの湧水が連っている。

長壇遺跡は、上竹井と細原と結ぶ道路が西側を走り、道路中央部は畠地で、その他は荒地である。辻ノ堂A遺跡は、ほぼ中央部は畠地となっているが、昭和30年代までは宅地と利用されていた。北部と南部は水田である。辻ノ堂B遺跡は、現在は畠地となっているが、西部はかつて水田耕作として使用され、遺跡の上部は客土となっている。

### 第2節 №.35(長壇) 遺跡

1 所在地 米沢市大字牛森字長壇5114他

2 調査員 佐藤鎮雄・佐藤正俊

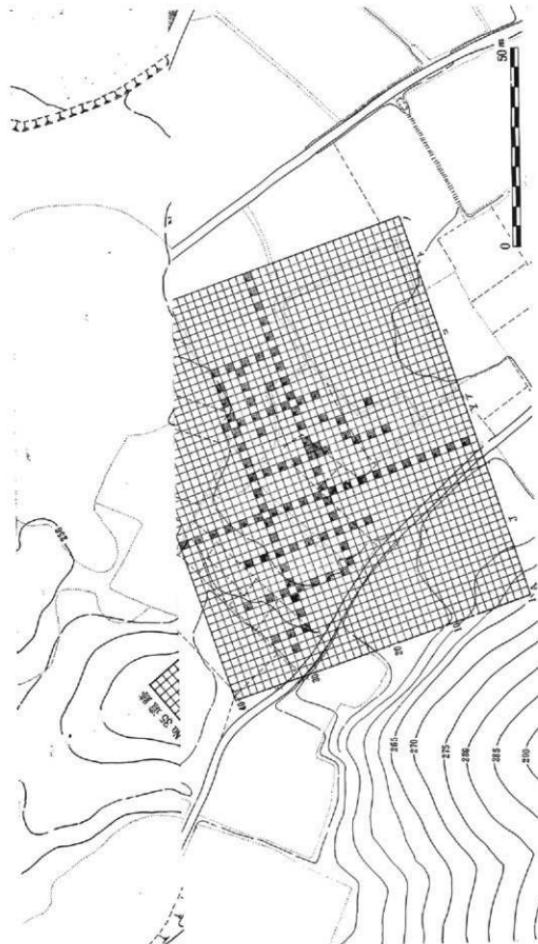
3 調査の経過

10月14日に調査を開始、10月24日に調査を終了する。調査は、遺跡の中央畠地を中心に $2 \times 2\text{ m}$ のグリッドを設定し、Y軸方向N-35°W、X軸1~25、Y軸方向A-Z・イ～トとする(第三十七図版)。

14日～16日 X軸方向J列とY軸方向5・12列に、3本をトレンチ状に掘り始め、50～70cmで第V層黄褐色土(砂層)に達する。遺構は検出せず。16日には、5-Pグリッド東壁より深さ35cmで、縄文時代後期の土器片数点が出土する。

17日～19日 5-Lグリッドで土器が出土した(第三十七図版)ため、西側9-P・Q付近を中心 $2 \times 4\text{ m}$ のトレンチ状に4本設定し精査したが、遺物は出土せず、遺構も確認できなかった。

22日～23日 西部と北部の遺構・遺物の分布状態を知るため、さらに8-W・X、イ・ロ、ホ・ヘグリッド、21-L・M・O・Pグリッドを拡張、とくに8-イ・ロ、ホ・ヘグリッドでは、第III層褐色土中より、自然礫が多量に検出された。これは川の堆積作用と考えられる。遺構・遺物は検出されず。





第71図 牛森辻ノ堂地区の遺跡群グリッド配置図